

善光寺道名所図会

四

ル 4
4500
4



門 九 4
號 4500
卷 4



善光寺道名所圖會卷之四

目錄

山三谷

中院權現

兒櫻

二王門

經供券塔

三本杉

鐘樓

宝物

寶光院權現

奥の院道條

制札

さうざ川

奥の院

岩窟三十三

寺中十二院

投の杵

十三佛

鬼無里

十五堂

秋葉の社

本坊

弁才天祠

百幅名号

戸隠領

朱の鳥居

下馬石

本社

瑪瑙山

山の神祠

本社

御裏山

礼盤石

飯繩の宮

浦見の山

熊の塔

一の牛玉橋

諏訪社

朱の鳥居

本社

神輿庫

十二院

神樂殿

神輿庫

女人堂

長明火定所

二王門

観音堂

神輿庫

佛手洗の滝

戸隠一の鳥居石より飯繩原にあり

御手洗川

日の御子の社

神樂殿

経藏

佛供所

手水鉢

荒神の社

鐘樓

見の塔

ツツ

法華堂

九頭竜權現宮

佛供所

高妻山

二季の祭

乙妻山

紅葉狩

是より善光寺(飯)本街道登りと記に

早稲田 大學 図書館
昭和 33.11.13 契
藏 書

- 明助山觀音寺 ○木留明神
- 大燈籠 ○千代霍玉霍塚
- 三疋山寂明寺 ○今井兼平塚
- 篠井追分 ○川中嶋
- 同車掛 ○武田典厩塚
- 氷鉈斗賣神社 ○横田川原
- 松代 ○祝神社
- 高坂彈正塚 ○矢代宿
- 一重山 矢代氏城址 ○鼻取地藏
- 坂木宿 横吹燒飯山 ○神神社
- 葛尾古城 同持城諸岩 ○中の条
- 岩鼻 ○半過
- 熊谷山蓮生寺 ○夜留番所
- 犀川渡口 ○丹波嵐
- 茶臼山 ○北原
- 八幡原 ○信玄謙信對陣
- 諸角豐後塚 ○山本道鬼古墳
- 千曲川 鯉の園説 ○西条山
- 蓮乘寺 ○山本勘八碑
- 菽蒔 同天王祭蚕養の説 ○雨比宮
- 村上山滿泉寺 ○下戸倉
- 鼠宿 會地早雄神社虛空藏山 ○村上義清塚
- 和合古城 三郡の境

善光寺道名所圖會卷之四

飯繩與岳より根菴原の免徑を一里をくり下りて戸隠に中院にお到る

○戸隠山 中院權現思兼命 本地 兼命 寶光院權現表春命 本地 將軍地藏

○奧院 手力雄命 本地 正觀世音 別當天台勸修院西界山顯光寺三谷一山坊舎凡

三十六院 東鑑頭光寺天台末云云拾芥抄曰戸隠山影光寺古仏遊行所云影宜作顯 九頭龍の窟と地主神九頭龍權

現ニ毎夜米三升炊之並以梨子為神供云

和漢三才圖會 戸隠明神 在戸隠 在善光寺之北西五里 社領千石 別當天台三年苦行勤之又歷三年交代

祭神 手力雄神 天思兼命之子 伊勢内宮相殿左亦祭之 常陸国志津社亦同一躰

押開天盤戸抛之其盤戸落于此云云 九頭龍權現 傳曰神形九頭而在岩窟内以梨為神供每夜丑

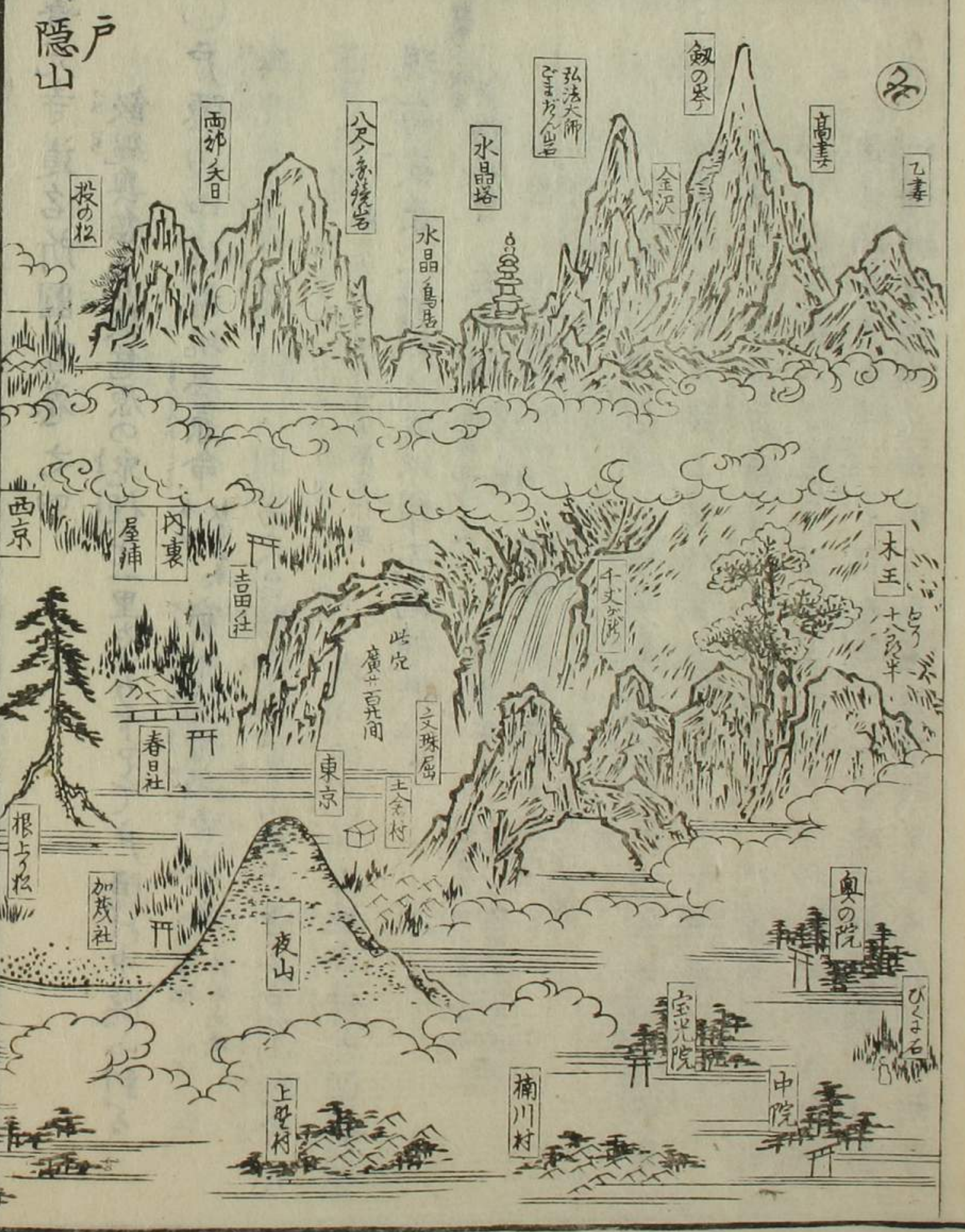
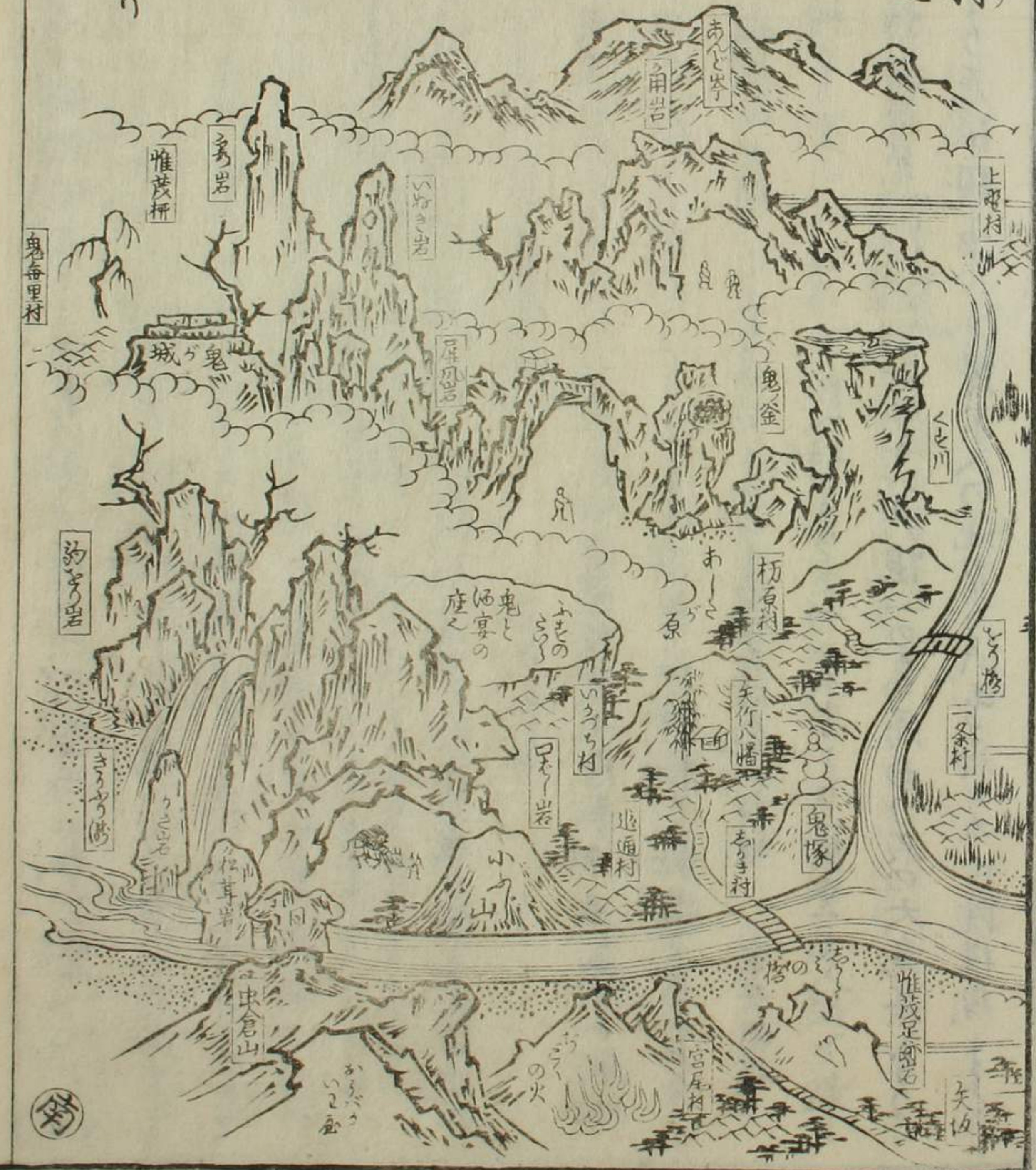
刻未春米三升備之疑此當山地主神乎為神秘 昔當山有妖賊隱棲惑人平惟茂殺之 平惟茂兼忠子也

伯父前將軍平貞盛為養子字曰餘五世稱餘五將軍是也 武名赫著于東州一旦潛身池水避急遽之難得殺其寇與

州澤勝諸任又入戸隠山手及妖賊其勇銳之氣可以觀焉

紅葉狩
名所之
圖

此景
其所
傳
人
縮
寫
爰
出
之



日本書紀

戸隠山の巉然屹立として東に秀川越中列岳西小争ひ聳へ北には
 妙高山あり中に安曇郡と帯て遙く眺むべ山を布く其石乃おど
 りは山深しと人跡稀ふいめ人妖賊捕らりて民の害をなすこと
 知れしとあり世に源満仲戸隠山の鬼神を平ぎ美濃國中川の
 山賊を討つ源満仲為信濃守平代可追考村上○中川按に神名式惠奈郡中川神社其地
 田融花山三代奉仕轉任八国云々平なり或は今の中津川なりといへり
 又云平惟茂戸隠山に鬼と斬せ又曰源頼義戸隠山に鬼を斬と大平記小
 見へたり或曰田村丸鬼神退治と云以上心説未詳

持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神云云按小水内
 等神と即戸隠神社なるべし天平年中神帳を勘造とあるは
 夫木 信濃路や風乃たり子むせよあつたの白く神垣 家長朝臣
 荒安村より直小戸隠乃中院へ行くらむ荒安より一里登り入坂と越え
 又一里餘飯繩系所飯繩本岳とゆき戸隠一の鳥居あり石の大鳥居なり
 は邊より戸隠領少く守護不入の地なりけり居より中院権現まどく

五十三丁あり一丁毎に石標あり○熊の塔熊の天○一の牛王橋○浄手洗
 川○日れ清子の社○児接みゆ橋ともいふ日の清子社○二王門外は宿屋あり○十王
 堂○秋葉社○諏訪社○朱の鳥居○神樂殿○經藏○經供養塔
 ○三本杉○一山三谷の本坊兩界山勸修院顯光寺天台宗あり門前小立石あり
 守護不入別當社職勸修院と刻き○辨財天祠本坊の南に地中あり○手水鉢本社の
秋葉社已下是近石階を登りて○中院権現本社祭神思兼命○神輿庫本社在
 ○浄供所日西○鐘樓日辰巳
 戸隠領千石内二百石神主栗田氏外小造管料三百石浄供系料八十三石なり
 中院坊舎十二院宝藏院 正智院 寿教院 行勝院 攝善院 實道院以上
 行勝院小百幅の名号と藏む縁起に人皇八十三代土御門院の浄守兼
 元丁卯年親寧聖人勅勘と系り越後配流光陰五年と経て建
 曆辛未子月中旬七日圓崎中納言範光卿と以て勅免ありき志
 くれも猶文彼地に化を施さん為小同二年の春少くび冥奈と
 ありたりい信濃路より飯繩山の麓少く清茅子に作るは西小



飯縄原
戸隠

中院寶物。苗二管。手力雄命け面。同御笏。猿田彦の面。

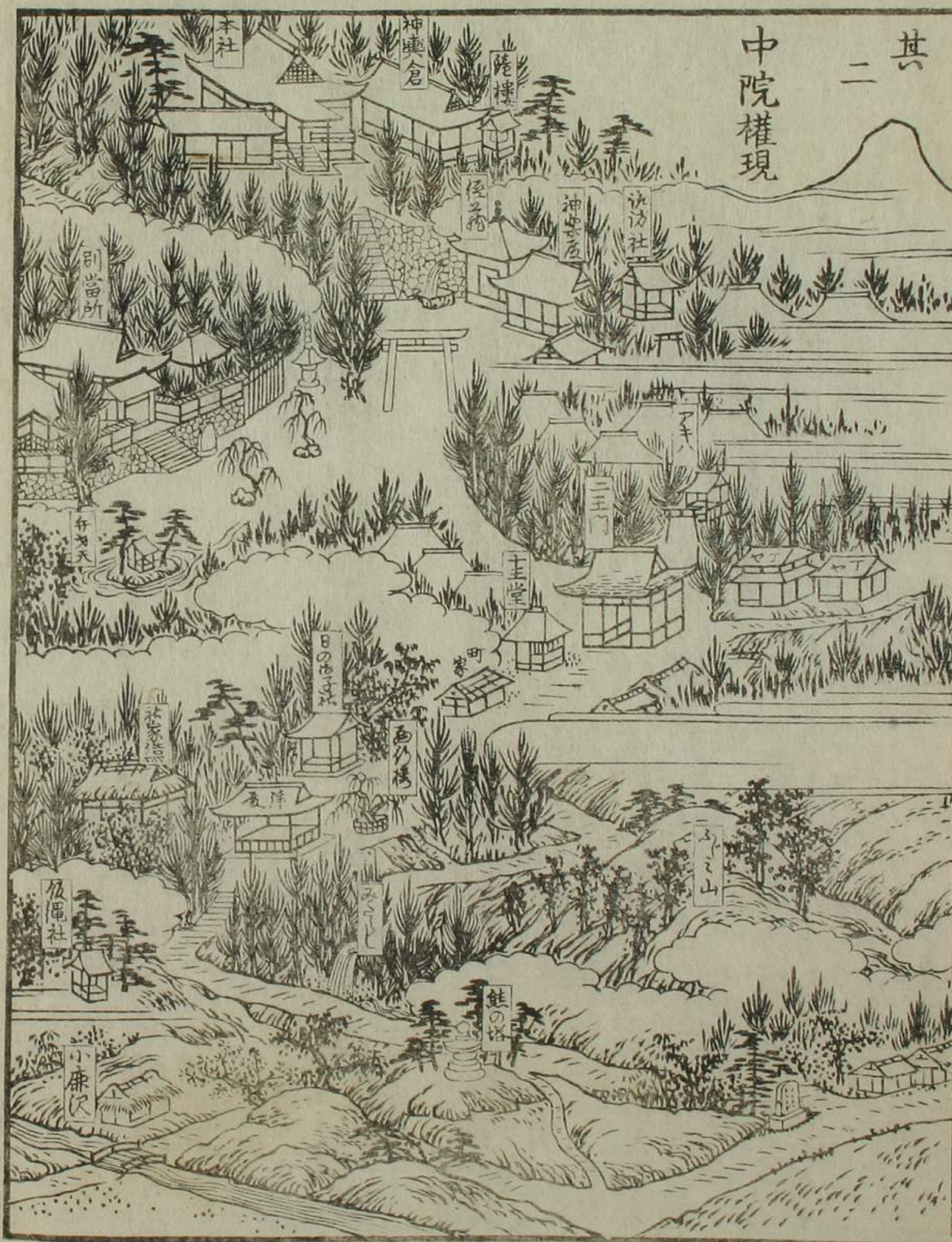
龍の面。伊井諾尊の面。法華經一部。武藏坊弁慶筆。

惟茂將軍に太刀。弘法大師の唐鈴。金。神祖御乘鞍一口。

△時と打事午と酉の鐘其外は太鼓あり。宝光院奥の院より太鼓

と鐘ゆく時を打り中院小准と

又やうに戸隠山有り。迦葉仏説法の峯殊小垂跡に手力雄命鎮守國
家此灵場にて王法弘法今と誓小弘する備に内神の道徳を
いそぐに續んとく道をはなれて登りゆ人其むく。我比叡山無動寺
在。一時戸隠の杉勝院に初稚の學友あるや。存命すれんと尋ひ
給ふに行勝院出逢へ其候自坊小清ト入と去。昔の地縁をれより
内宮へ系籠ましく。既小奥の院より兩界山まで七里れ及嶺く。岳
山うれはるも習つぬ法草鞋小竹の杖と力く。投の香をけく。いつ
祀盤石小至り給ひ内経讀誦。給ふは一日乃向方り通ひる。小
日毎に名号とかきたるひ百幅成紙ありて未せ此衆生淨土往生證
據の爲ゆくと行勝院授與。給ふ。下畧。



○宝光院権現一の鳥居より廿八丁目大久保村乃分岐口に傍示の石標をたぐ
入り男鹿沢に橋をたどり又分岐道あり右を控尻道左を鬼無里道より
橋乃側左に前原地藏堂同く神明宮あり二王門を入る左より
坊舎十二院あり 普賢院 善法院 偏照院 延命院 教教院 玉泉院
安樂院 廣善院 智照院 福壽院 法教院 淨智院
附言遠州秋葉三尺坊々教教院の住侶ありけ後小天狗
道に入ると云

塩尻 秋葉山の觀音の行基大士の作りてつと古に靈場なり三尺坊々
三百年以来山小祭の信州戸隠の飯繩を勒請と云云と古縁
起等此心くはつと彼山の修験者つり 乙未五月八日 快然院著
石階を登りて朱れ鳥居 左右に垂格 右の山手 ○神樂殿 ○荒神の祠 東西小 土祠を 又石
階とのり橋あり又石階を登りて本社より祭神表春命
○神輿庫 本社 奉納 ○鐘樓 同所 奉納 此所より中院十二丁の捷徑あり
宝光院権現の寶物。牛玉れ玉 東海より 奉納。惟茂將軍の太刀 荒葉山紅葉狩 鬼神退治の太刀

○俱利伽羅の太刀 同將軍 奉納 ○羅漢掛物 北殿司 奉納 ○雲坐阿弥陀 親變馬聖 人奉
已上 是より中院へ歸りて奥の院道裏山道をあらは

奥院道 中院本社 右付く 三丁目 ○山の神社 右の山手 奉納 ○女人堂 是より内女人結界といふ 奉納
の石と成る 八丁目小右へ越後の分岐道小石標あり 右越後 奉納 越後の方へ一里半入
りて裏山道 戸隠村より山 奉納 左へ入り ○釋長明火定所 右八丁目立石 奉納 九三十

歩むの中央小五輪の石塔 右の方に康保三丙子と 奉納
叙長明居信州戸隠年二十五絶言語誦法華亦三
歳不偃臥一日語人曰我是一切衆生喜見菩薩也
来此所燒身已三回今命盡上兜率便積薪入内自
焚 康保年中也

五輪高四尺余屋根石三尺四方をうり臺石高サ三尺斗上に柵の本一株有
○兎の塔 右ふ 奉納 此の塔の石をせり或時女れり外よりみを通りけり婦ら
居り合せ男ありかりて文字ありさりたれえふゆるけりをい
いようさのまうちの目いりけりとは山の兎れりありてい



或曰濡めき葉とて其
 袴袴も又依れま母と
 多通と此見るとて実と
 告て父ははるりりめ
 さるや曰く父とては
 愛する人必ほ
 の母は厚し罪
 らまとも頭いさげ
 父の心を安く
 めんが為なり音
 晋乃太子養
 母瀧姫のあま
 身危し人形
 瀧姫が罪なり
 白へりて老よりらく
 つか父老後ひて瀧姫
 なられを安くはり使が

罪とありはこば父
 怒りて彼を捨ん我
 見ふ志のひどく
 ついてたのそ殺こ
 きのひぬ其ま子
 と変らつれども
 父の心を休め母
 ぬも放す
 みるもお何
 母も人なり
 思が知れぬ
 過を改め
 さるめ

此多よみききせよと取つてきれば披きんく思ふやうさち有の
 ぼりよまば養母も追打とて父もなやみあさつをまわし外
 此事にんや一續々ま本より父も一も是を特つど何れ
 めくさつけるその情を感してくるむ

位徳する本る諸ふか九本橋ふみろ時を河やうりーに
 志乃なる持のたつりもやうらつとてぬえ本とてよさうりそ
 寔に父のまごころふれぬれぬをよみく其難を救ひ心をくま
 しん丁やけ鬼の塔なりとそ本朝孝子傳小見之きり

- 一ッ橋 小川 ○制札 ちまよ ○ちうさ川 ちまよ ○朱の鳥居 十五丁目
- 下馬石 二王門の外 ○二王門 二十丁 是より内大杉の並本両側小茂て
- 其根麻を乱るが如く洗つて出 此道本ら停替れ残道に片枝の杉とて 此根
- をほしひ行ふ大岩小岩路傍小轉び出苔むしる間を攀のぼる
- さや十丁よりいかん御手洗の末滝津湫なして右耳を澄せり○観
- 音堂 二十六丁目 ○法華塔 二十七丁目 ○奥の院十二坊 左小十坊 勸法院
- 右手いあり 左小一坊 常楽院

戸隠奥院并裏山之圖 其一



成就院 佛性院 妙行院 常泉院 安壽院 此十二院の社領の内十
 妙観院 金輪院 東泉院 真兼院 妙智院
 石廿石三十石づつ配當あり又釋長明の妙行院小在住せり康保三
 火定小入 ○奥の院權現本社祭神手力雄命 ○神輿庫
榜の向 ○御手洗滝 本社左にあり ○九頭龍權現 本社右にあり ○御供所
ふあり 同く前の下にあり八月十七日交代翌年八月迄
出入三年勤仕り是は三谷三十六坊の内を順廻す 但し奥の院の寒氣甚く雪や
 休く定住成ぐく十二坊のみ形里の別荘に住して空院之唯御供
 所の詰番一人に侍者一人僕一人の定住あり毎朝米三升炊之神供
 とけ并に梨子と供よと毎年正月元日に別當顯光寺奥の院へ參
 詣の前手輿をあんいのせて雪の上と人夫あき引小鳥居の上をゆく
も所をき 雪の深きる知る一折奥乃院嶽小二十に巖窟あり
二丈あり 各其号圖小顯然とり東に黒姫山やで山脉續とり西の方百丈
 滝西光寺跡僧ヶ岩など皆西南小あり一夜山新倉山 紅葉鬼神の
 是より鬼無里村小出 此の村の号は鬼神退治の後今より鬼無里といふ



九

○戸隠御裏山 中院より七里 乙妻山高妻山足を劔の岑といふ又西界山とも稱し金胎兩部の曼陀羅と地小妻なるを以て名を冠せ故小妻指の輩此登口にて草鞋を替る所の以りう道通に十二仏を置く頃路を二所各青銅佛あり不動尊は石像なり例年六月朔日より七月晦日までを清山明とて登山をゆるげ

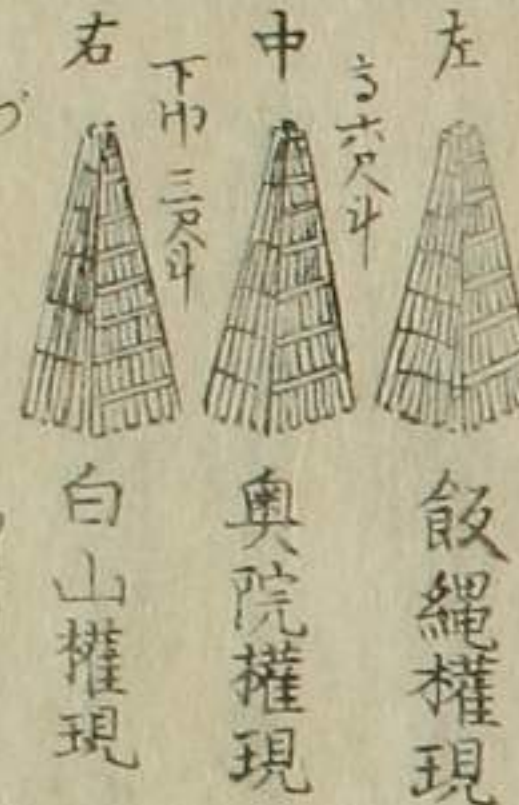
中院より八丁目小右越後の分道より又左へ
 市裏山之分道ぬき登口へ越後道を直にゆけば大池二ツ右と
 涌池左を種が池と云大岩境の宮あり けきい側を外まおきを越後より運送するなり

○投の杓 五系より 地藏の邊より始りて奥之續き七谷ふ延きよりて磐
 茂一芳れ如く其杓をたるてれ登山の輩は此系を採り歸る難
 産并齒の痛等功徳著しと云○古池 九勢至の先あり 登山の者多く中院
 ままで日帰ふきりり嶺ふ通夜の輩は礼盤石より小池の弁天とゆき
 池水ゆく粥を焚く薪ふい投の杓と手折く用申と云昔はけ折ふ

籠屋ありしが雪は漬きて今いば○禮磐石 大日の例あり 虚空藏までの
 行難し此所して谷を隔て八尺の圓鏡曼陀羅岩を拜む 礼盤石あり

○二季は祭礼は四月七月と四月十五日奥の院十六日宝光院十八日中院と
 三谷の坊中糸集して誦經神主栗田氏參勤又戸隠派の修験者て
 三十余人あり信越兩國の間三四十里四方に散在せり此輩四月十七日

ふ登山して十八日中院の祭りと相結祭終り本坊へ參勤す 山伏の内り
 七月八日中院十日宝光院十五日奥の院以上三ヶ日とも
 火祭く三谷の坊中糸集誦經神主糸勤あり扱火祭の次第も



圖の如く片方小足當と着く三本立るは是を柱杓といふ三谷の
 坊中ぬき一人づ當番と定む是を先達と云扱先達は院ゆく

三谷も廣前小如此順ふる但飯繩白山は隔年に左右りるなり
 中院は三本とも竹ゆく指る 宝光院は三本とも木で指るは夜は宝光院
 門前七十軒の者い年中木を伐出せ候候せし中院門前八十軒
 斗の者竹を伐出せ候候せしなり
 奥の院柱杓は兩院の門よりなるなり一本半は竹一本半は木
 三本の柱杓に神杓を号するなり古傷あり其いれは

幣この幣は製二本と紙帛で作る 三本を一手に持て三人へ一度小流を受取
一谷や三本を銘く神前中儀 神前小立並へ先達の唱辞莫終
と等しく神前へ走る是中まはる 神前小立並へ先達の唱辞莫終
て又以前の三人へ渡り直に柱を近く投するをよめて又取柱
松小まきく火を燵く焼く其焼方に勝負多く年内豊凶を定
む此火祭の己前に長刀れ試闘あり惟茂將軍鬼神退治の古例あり
との坊中弟子乃中しく衣小玉襟を掛く戦かり八日ふら中院より
長刀二振寶光院より一振十日ふら宝光院より二振中院より一
振出る但一本刀一振小
法降二つある 十五日に奥の院へ長刀の更をなく火祭のせり
同月三谷に太く神樂あり定日十八日なり一年に宝光院一年に中
院二年に奥の院と順番に神前めく執行あり又八月五日に中院を
まけて執事神主西栗田帶刀回職十人程少く執行あり
○飯繩の里宮日の出子れ
本申に在 是に三谷より一人づて一年づ年番少く持あり
△法裏山小の茅草多く茶本白木
黄連其外 夏秋の茅草と揉人多く又桂の本斗の一谷

五善光寺堂普請等にい買取ふる難所を出入りし嶮岨なりといふ

戸隠詣

善光寺別當権信正孝寛

上畧

はいつ川に降り雨降るさほり六十餘日あり是古かたれく草木にほく人
民れおれいあつるさつらんさつらん一里にあり登りて四方に黒くま
おろく夕立なりて洞いへ善光寺に境を限るる幸のさつとい
わらねん爰小九頭持現を龍まにまはせは雲をわらへらまは成
くくくくく神カ自在なりましく是無をりくあつる人の度さ
みつろくしんをてあらんやうは形をともみふらまひうせみ人々
本のみらうひをもあはしはやくま

神もききとあふはさくさくあはれ神く一里ふらまきうらねん
縁うよさや十う九つこの川に新のあいら忠神なりいさけ
と福さして本宮にふりて奉納乃さつ縁を
引明一岩戸を神れくくわさて日新あつこれ代をちりま
かして清供所にいなる教法流達へいさく素よりれむ川ひるれ
何ぞく神酒をいさくせめてたさくまはくさくこうりま
名もあつる茅草れ地なり是も茅草はくはくはく二つてこさくさ

中略

とて申け刻以カ迄乃本坊にゆり居ぬ志つゝ休しやせし
俄小室より墨をふるより出く車軸を流さず如しこい九段勢に
現の感應は雨よりや人々罵りたり中畧廿日とて起出く是に
ありさのよりすゝとやみれくゆりしは林雨客襟冷を獨ら
て是るものりしと勢打りし如きより中院持現乃太く神未あてお
あしも出ぬ石はとせざる者と持るはあはれまゝある年れ刻をり
ふたてくはうり也下畧

○戸隠山の西南に鬼無里村あり土倉村嶺をいふ所と越く戸隠山と右
小見く黒姫山も出越後わける間道あり永禄年中牧の嵩の城小武田
より馬場美濃守と置く越後の押ともはる是か為なり世に戸隠山を
浦見の山といふ此まより。浦見の山八雲山抄に依はく
夫木 尋りやさちれき傍ら志くはる人々をいふの山乃通路後三位 為實
○鬼無里に南小大塔といふ所あり今大道 峠は作大塔記小應永七年小笠原長秀
小笠原井川の館政長の孫長基子 信濃守に下向の時伴奈郡より佐久郡
世小三義一統の作者といふ

いづれ善光寺ふいり時小圃人と不快の事出来く同く九月更
科那塩崎の要害に楯籠りて合戦小抄より伊奈一郡味方と
て一日四度に戦ひし長秀終ふ討負水内郡大塔の古要害に逃入
志るを兵糧乏しくして上下に飢渴廿余日小抄より長秀れ手乃勇士
三百余人悉く討死たり此時佐久郡耳取の主大井治部少輔
光矩和儀を入り漸く軍殺ばりて長秀も舎弟政康を
濃州土岐より呼返りて惣職と權り上方に退去云々又いづく
頼阿信濃の名所とんとて長秀に伴ひ下りし小抄の外より
事起りて籠城のうらにありて窮院言語小絶より姨捨山の詠
此時のありや記せり

卯菴集
九月十三夜
姨捨山を詠
よもいづれも姨捨山を詠といふらひたふはゆるすめる月夜
按應永中頼阿存生の非也
頼阿藤原道長公孫師實公之後俗名貞宗出家
号恭尋後号頼阿二階堂下野守光貞子也

平惟茂も貞盛の甥
 あり世人皆吾將軍と
 稱せし東洲の諸任
 と討つるは
 其威名近國に
 傳はりて
 位取戸隠山
 此紅葉と
 遊談
 今ひけふ
 妖鬼美女と
 變じしは惟茂
 乃命とせし人
 也
 八幡大菩薩の
 大菩薩小よりく



つひに
 其の妖
 賊と
 一
 身よ
 恙
 中
 山寺に
 月
 月
 の
 め
 般
 ても
 あ



山里
 の酒
 鬼
 川
 庵

六樹園

傳云貞治二年の頃七十餘歳攝政良基公小會して愚問賢注と著

一正風の龜鑑とて後雙林寺に寂して八十四歳東野州南書に忌日三月十一日

又迎陽文集と引て仰蔡花院の平生棲息之閑地終身安心之幽莊也

頓阿五句頌文應安五年四月日弟子法印大和尚位少僧都經賢敬白とて

たれば頓阿と應安中遷化疑ひをうべし

院へのなるに雲なる山のうふきと行く中堂ふ南北ふく山乃嶺

あり抄のくまに岩をささきあましく八色をうへたり千峯

萬山のくさられらるる靈木異草うさなりて或も佛菩薩の来

化の姿もけり或も天人を庇の妓樂をささるる所もあり併

觀音薩埵の勝地ゆくそ侍らん社頭と水の嶺乃半にけりあが

アく東に向ひ大なる岩窟の内へ造り入きりうの清神と

多力雄みくほくまに其のさるるを

竟惠法師紀行

上畧

瑞籬やあつ川岩本に去きれあつるも神の力とせざる

吹ぬろく岩のあしをほきき行ゆきや谷れ戸江乃山

十六日又杖藝乃山室にとりり勢下畧

○明助山觀音寺

普門院と号に中の法新村小在本尊馬頭觀音と稱し觀音と稱し頼朝

卿の守佛といふなり九分又正觀音一躰智證大師作めて伽羅佛内丈一寸八分

右に二躰安置と

縁起曰

文學上人治承四年七月平家退討の院宣と下し伊豆の北条

蛭ヶ小嶋小赴き頼朝卿と授きく義兵を揚後同五年八月

十七日頼朝卿初陣に伊豆の目代和泉判官兼高と討ちあはし

石橋山とて大庭景親股野景久梶原景時等其勢一千余騎

と合戦ありしが敗軍はく頼朝卿に纒七騎少く土肥の杉山と

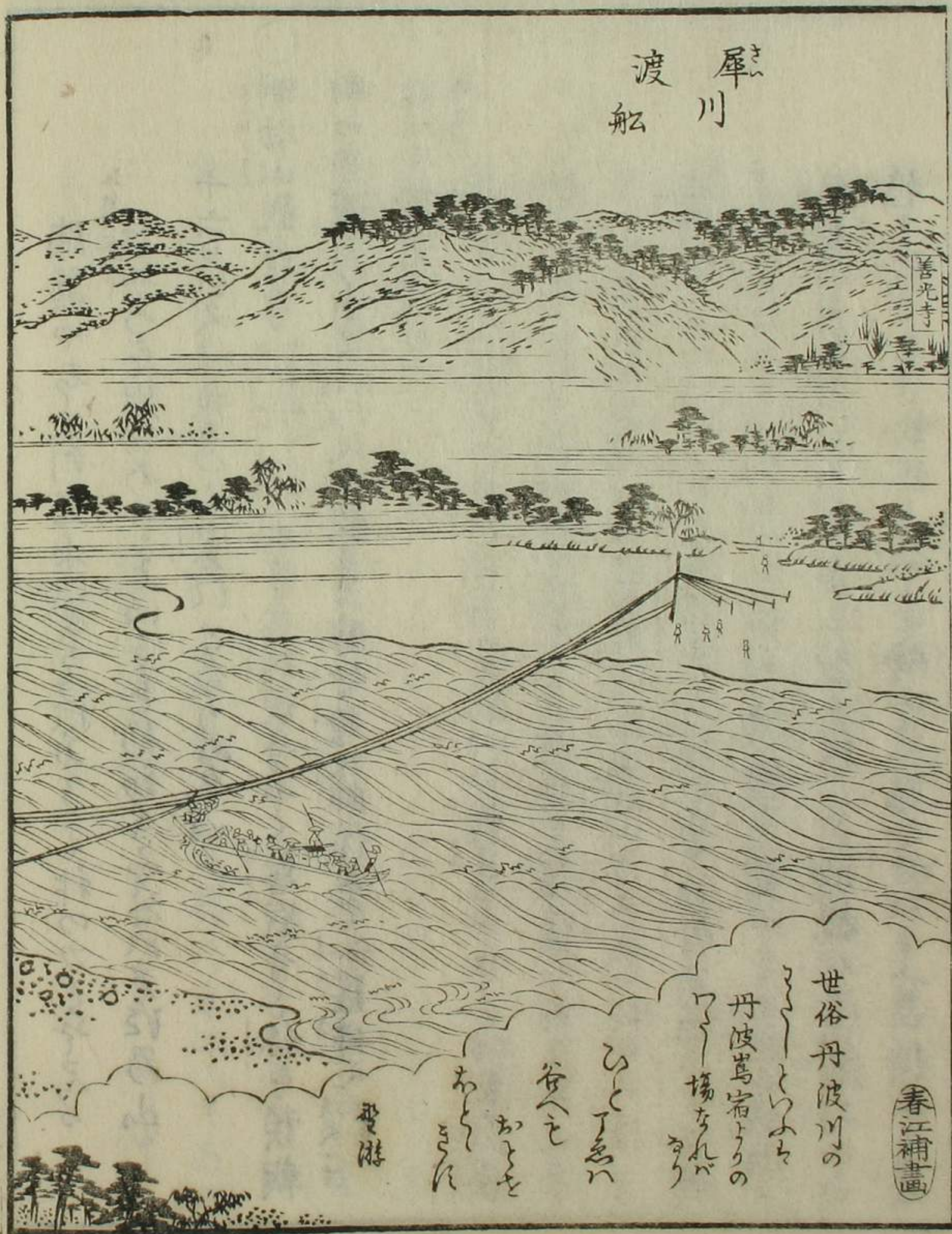
紛れ入りて右本に空ふ清身を強し終る其時觀世音の雌雄の白

鳩と現れまじ蜘蛛と化して卿の危難と救ひる其後本尊を



後士の是
 中彦

犀川
 船渡



善光寺

世俗丹波川の
 丹波島宿の
 場を

ひと丁急い
 谷へ
 おそ
 あそ
 遊

春江補畫

仲追討のつめ壽永二年三月十九日鎌倉を發軍あり木曾義
仲の信越乃境する熊坂山小陣を取ら此時も勝利あり本号夜
より嫡子清水冠者義高十二歳たる人質として幕下に越され
々々頼朝御大小收び清水冠者を相具一鎌倉に歸陣し終る
其後源氏一統の世と成りて建久八丁巳年再び善光寺へ往來指
の時も當所漆田村に滞留ありくくる夫よりして此所を中
れ清原村と唱へ来り然るに髻觀音は示現あり此所我有縁
乃勝地なれば爰小留りて永く末世に庇生を依まべしと出言な
ると頼朝は止まを得て一字と草創して清守仏馬頭觀音及
び正觀音一軀と安置し給ひ自ら額と彫りて明助山普門院觀音
寺と名付ぬ
下畧

駿基雜記

さる時警中にも仏の小像とゆひそくを首と敵に渡さん
大將軍其所為にあはれいとせんやそか人のくつれ所ふく
至きとなりつ門の正しくなるまれん死しきりあるや
仏をねみく後生をたさうんと思ふ丈夫の志とあらはれ
恥うと思はるまじくはけもたさくや志ある佛とばさる
まじくいふとば持たぬやかくやあまき是とめて人々羞要乃
あまを固有るつとまきとあま
下畧

○木留明神

荒木村の内
古側あり

住吉明神を祀る俚老の曰む善光寺伽藍造営乃良

材多く犀川を下き折る洪水して大材むねしく北海小押
出方んとせし住吉明神忽然や現るるふし不思議の奇瑞
さるくありて材木もさるく此ありり以當り給ひしよよん
け所小祠を建て木留明神と崇奉るるかた

○熊谷山蓮生寺

吹上村
右側あり

寺傳聞渡り此を新朝の古跡多し

○夜苗れ番所 はしく 犀川出水のおと川の瀬もはごうなごうなる故旅人
お留とて松代侯より此番所を建てるに旅人を憐れ給ふたり

○大燈籠 石ゆく左右にあり善光寺に燈籠なり

○千代霍姫 玉鶴姫の塚 市村の伝にあり 此千代鶴玉霍と熊谷直實の
娘なりといふ説あり如來堂よりひきままで十八町といふ

○犀川の渡口 俗に丹波川の渡といふ丹波寄宿あり 川中十八丁深山の谷川幾瀬より
かく落合ゆく急流の荒川なり出水の度毎に淵瀬習りて定方

ち山川のまじひたるへ東海道富士川にまじり急流なれば尋
常れ渡といふ事異り竿ゆく不叶彼方岸より此方の岸へ大
綱を引くといふは小綱を付き舟人五六人して其綱を繰りてつ
ま此川下に綱切の渡といふあり永祿の以上杉謙信戦場と聞き其渡
を越し敵の追来しん事代ありて綱を切捨りしとありける急流なれ
ども代士をいひしる易なるに良しとせばは運巻水に任せし思

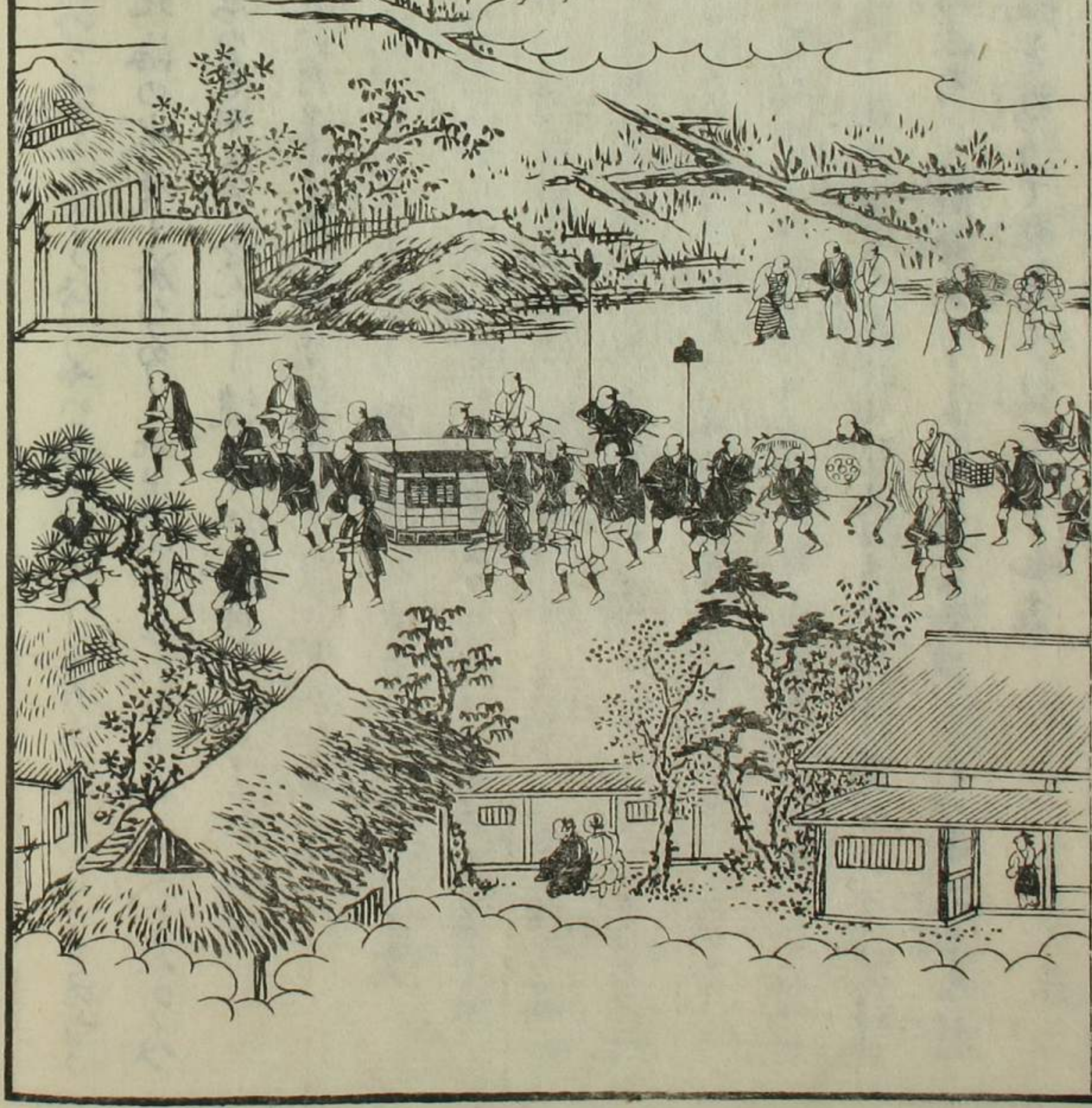
ひるげなるいづれ老ふはや其後をいふ岩ふ突あたるもの
は忽ち碎く北海の水屑と成るなり此道ふ世をいづる松山人の左のみ
をくとも思ひをやりをんり流年川暗度といふは代頓阿
志ろといふ月日とてはては年や測れもなれ山川乃水

丹波嶋 更科

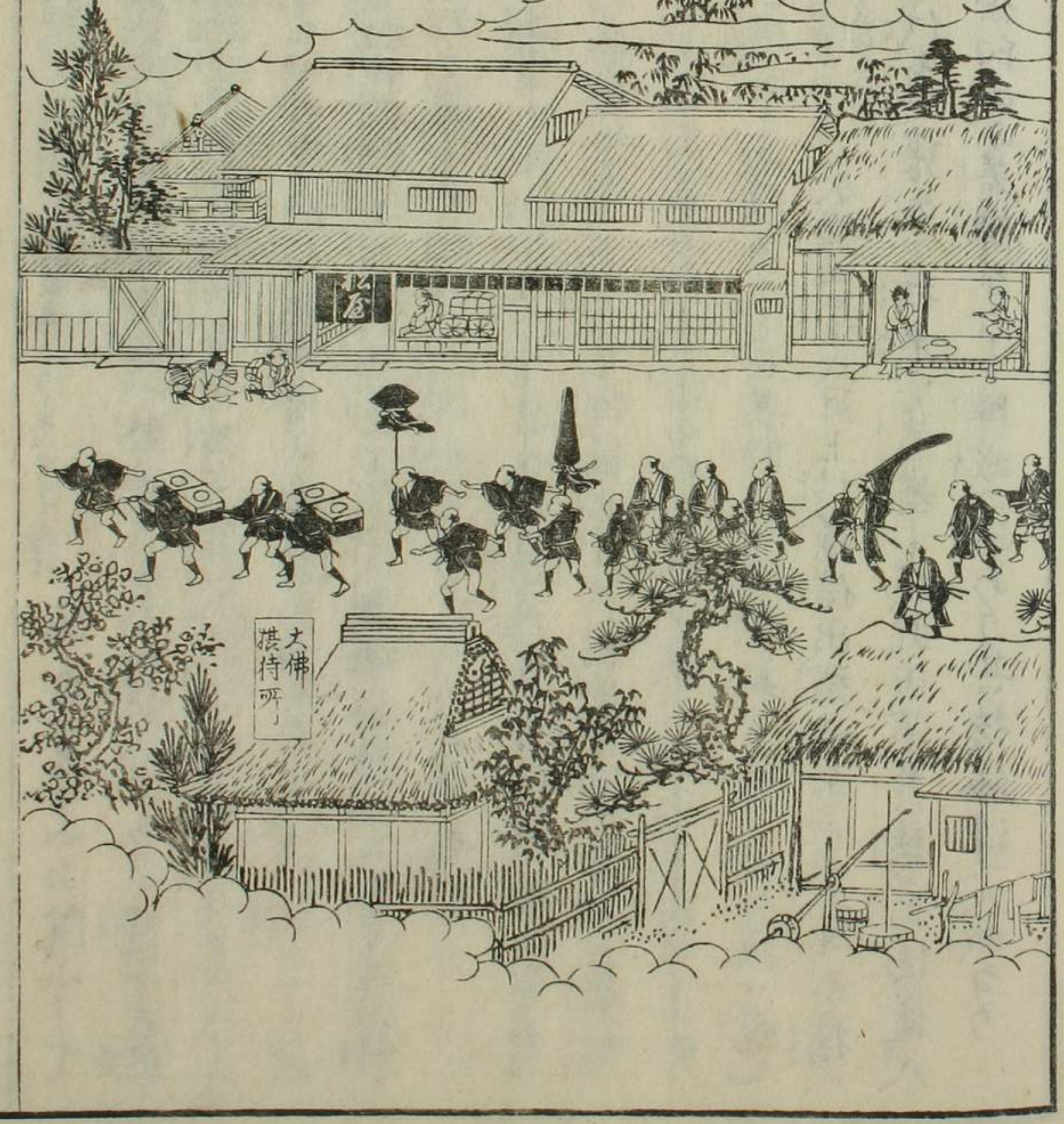
六町程相對して巷とて其餘町裏に散在す矢代宿へ三里

上氷鉈村北原南原芝沢津幣川弥勒等村を徑く篠の井乃退分
いづる右と京伊勢道左と江戸道と千隈川を越く矢代宿より出る是北
陸道へ出る順路ゆく諸侯も往来しゆたり又丹波島川支れ節川下
大豆嶋の渡りと涉り可い峠ありき坂より松代の城下より西
条山の林を巡り雨の宮より矢代宿へ出るなり川中島天文永祿の
頃甲越の英雄志も闘争ありし名高れ古戦場なれば其大旨を拾
録しその古趾を搦りて粗きを誌する如左

北原村に大仏の
阿弥陀堂あり
撰待所あり其
向ひ小旅籠茶屋
松屋何某といひ
川中宮古戦場の
田説教年来吟味
して案内と
即其面と
板外と
旅人ふこれと
印と
又裏小池あり
大乃の鯉を
救多ゆ
其外いこり
小蜜蜂を
飼ひ蜂の
蜜を
家あり
とぞ



甲越之兩將帥師
戰于信濃川中嶋
其戰世所知焉
然審知其古戦
場者少矣間友人
松屋主人者審
関川中嶋古戦場
以上梓併小冊子
使人感古云爾
探齋題



○三疋山鎌倉院寂明寺 丹波島より東一里亥嶋村の字本堂といふ所あり 詣りて見る小小院ありて

堂に本尊阿弥陀佛唐銅佛一軀あり仏具の飾りも亦く侍小本札あり 當山開基鎌倉寂明寺時頼入道 弘長三戊午十一月三日 寺傳聞するに

寺僧を尋るにありて位僧出會ぬと云く由を尋るに祥なきに只之に乱世に什物其外紛失して今の無祿無檀地と成り大に衰廢より但あはゆの記録に松代大英寺にありとぞ答へたる

○今井四郎兼平の塚 今井村兼平山功勝寺にあり 兼平は古跡筑摩郡元洗馬ゆとあり

く信作の薬師如来の堂今も猿轡昌なり里老の談も兼平が居館より業師堂まで一里之間泰信の時風雪を清ん為廊下りりしやるん今に其礎所も残ると云其時代の風俗ありと希有れ一説に

○茶臼山 岡田村の西尾田河原の上あり 永禄四年八月上杉謙信出張西条山小本陣を搦

先手の矢代色へ張出し往来と差塞り故武田信玄は猿轡馬場通八幡より茶臼山小着陣あり陣城の跡あり其後海津へ入城あり

○川中嶋合戦大意 武田信玄四十二歳 上杉謙信三十三歳

永禄四年辛酉八月越後の謙信は上杉殿上州平井へ歸住の儀信州は通路不自由なるに依り調へて今度も信玄と有毎の戦して関東は路を開きさるりれをといふやれく一万三千計の兵を率して出たり是は信玄が後攻小左右より妨らして陣を廻しぬ度海津より奥へ入る信玄出るに海津と信玄とみぬ一方に受くおちつく戦り小越後より後攻押来り善光寺を先陣として犀川と前小當て入代り戦いありん小信玄終る敗北せん信玄是を悟り出張せどんば西条山小兵を張り半と出して海津を攻む小落さん事輒るるべしとの元沙汰頻なり其節の趣は

一軍兵七千五百計は外へ人足也但善光寺近の道中へ人夫と以荷物送るべし而荷物大略善光寺に残り中傳へる要用の物斗持集ると云へり

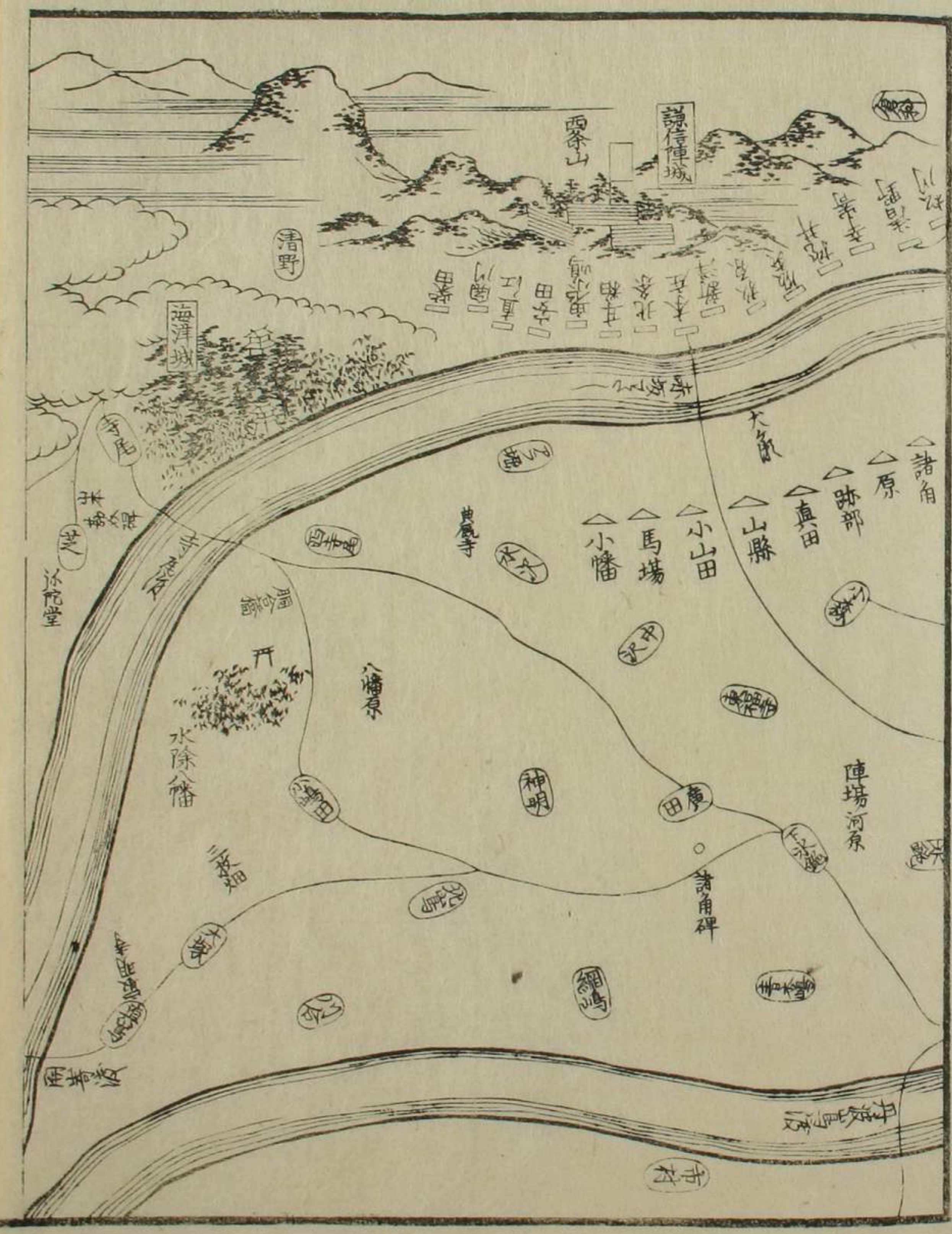
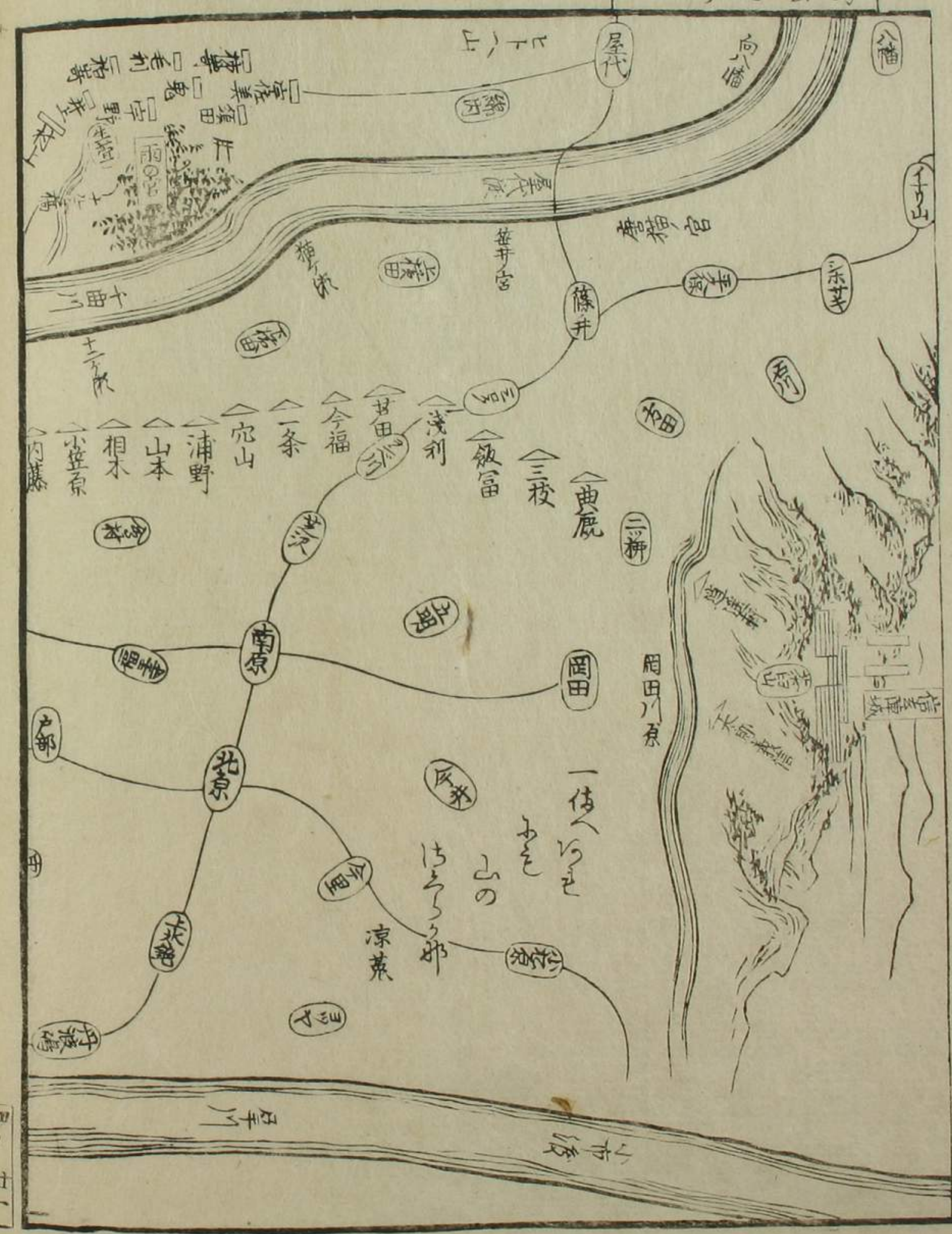
一 若光寺迄去荷馬少く有之在方川と渡てい悉安否とて
 一 兵報く幸若光寺集並一丸次弟彼地へ送べし
 一 近國降急く大名并遠境之諸侍の道く遠近依て是速定かこ
 々色各手寄り来年まで一彼地後攻く幸ハ一方太次弟如法
 可獲獲之付 軍役之諸色御自今之騙を費さく守城代北条
 丹後の相討旨ト付也

斯く八月十四日春日山と癸軍翌日中寫に着陣雨の宮に涉り越へ海
 津の向へ西条山小陣をす一山下れ小家少く放火せし以海津城代高坂彈
 正兵を出し所を焼せりと恐る色なく下知せしと之以度甲府へ急を告
 ぶ幸属なり々色は同十八日信玄一万計の兵を率し甲府を去立兼
 くれ法の如く道を通り軍勢相加る信州先方流七千余騎猿ヶ馬場より
 岡田の茶臼山着陣小都合一万七千余騎とて同之
 甲府より三日路の所今度の七日に押入りしはぬくの思慮ありとて備

此外海津小三
千五百余騎 常之

一 萬七千れ勢と二つ分く雨の宮乃渡と遠くと巻海津との間ハ一万余
 騎雨の宮より川上ハ七千餘騎陣敷都て廿六陣川中端に充滿て其見へ
 一 頼く上杉へ使と遣し今度深くと信海津を去責あふきや又
 某と戦ひ結りんや去返答ふ依く其意をて得と有り謙信答に仰義
 以早裁いの儀従是は左右に可及と有り上杉の老臣等評議しるるを
 越より後攻早しやき一度来たる共故ら此方より出く戦りん
 小の地形を難ふれりしに敵の大勢備を設てし所へ然も一れ敵
 城を交し利ありとて二つゆ今れ分やく徒に對陣せし軍勢丸妨
 せせ押込らるる氣と屈せん越の兵来り敵定やく兵を半分
 く越率にむひなきとて君と戦りん志し一方打中より其敵陣
 につ易わくべしとて謙信宣ひられし第一敵の張陣してその
 機たるに新なり善く兵を用れし其銳氣を避て息歸
 を撃とてその分やく敵をて河原にけり一免は彼が謀乃

川中島
 小て信玄
 謙信と
 對陣の
 畧圖



色目小走らざるに顯るる處一すゝ敵い山陣に來るべからず
り一來り攻べ敵初ノ工乃如く鳥雲山陣より敵小走らざり又軍
兵の狼ごらぬあつて放火乱取と暫く相止溜り成る敵の機を
ぞ一尔くされば予諷諷等閑小日を送るところなりおろすて若
く兵糧を養ひ越の顧をとる事なるとして例の一重切の八
とりち一折しや吹く暮されたる

信玄も種ご別工夫ありて八月廿九日又西条山へ使を遣し出陣
を待く數日中鳩小居在るといふも其沙汰喜之小信く只今海は
入陣もるものなり一戦の儀は尤も次弟をくべしやたゞ謙信
返事に度く使承りいひぬは入陣のより得ま意ひ一戦の儀
と近日は尤も小可及者なりと信信言ひ茶田山より備と繰下
し廣瀬やを下りて海津の橋手より入り是れ敵今にも出るは
戦むと道をあつてさう招く松小見せく用をれ心得なりとや

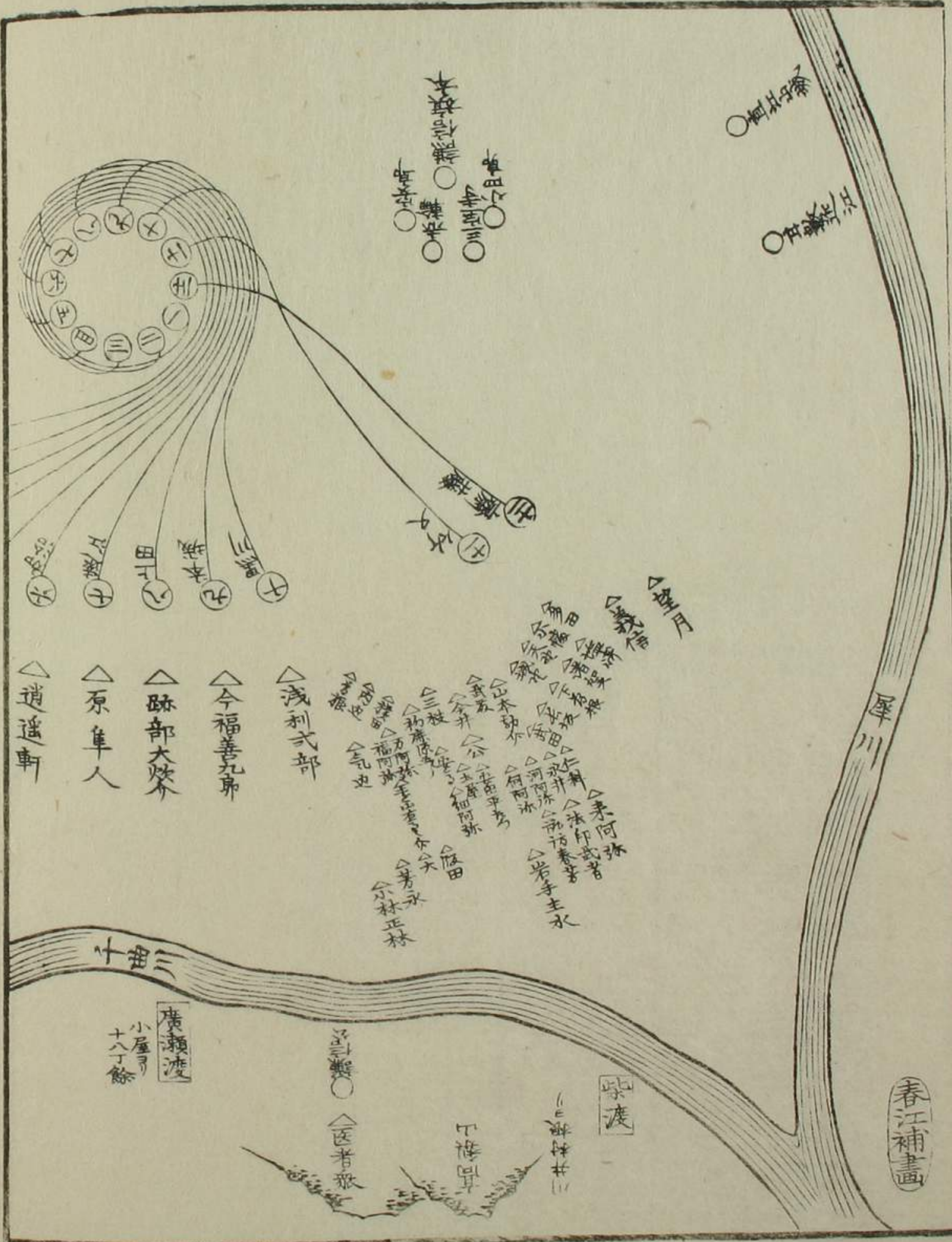
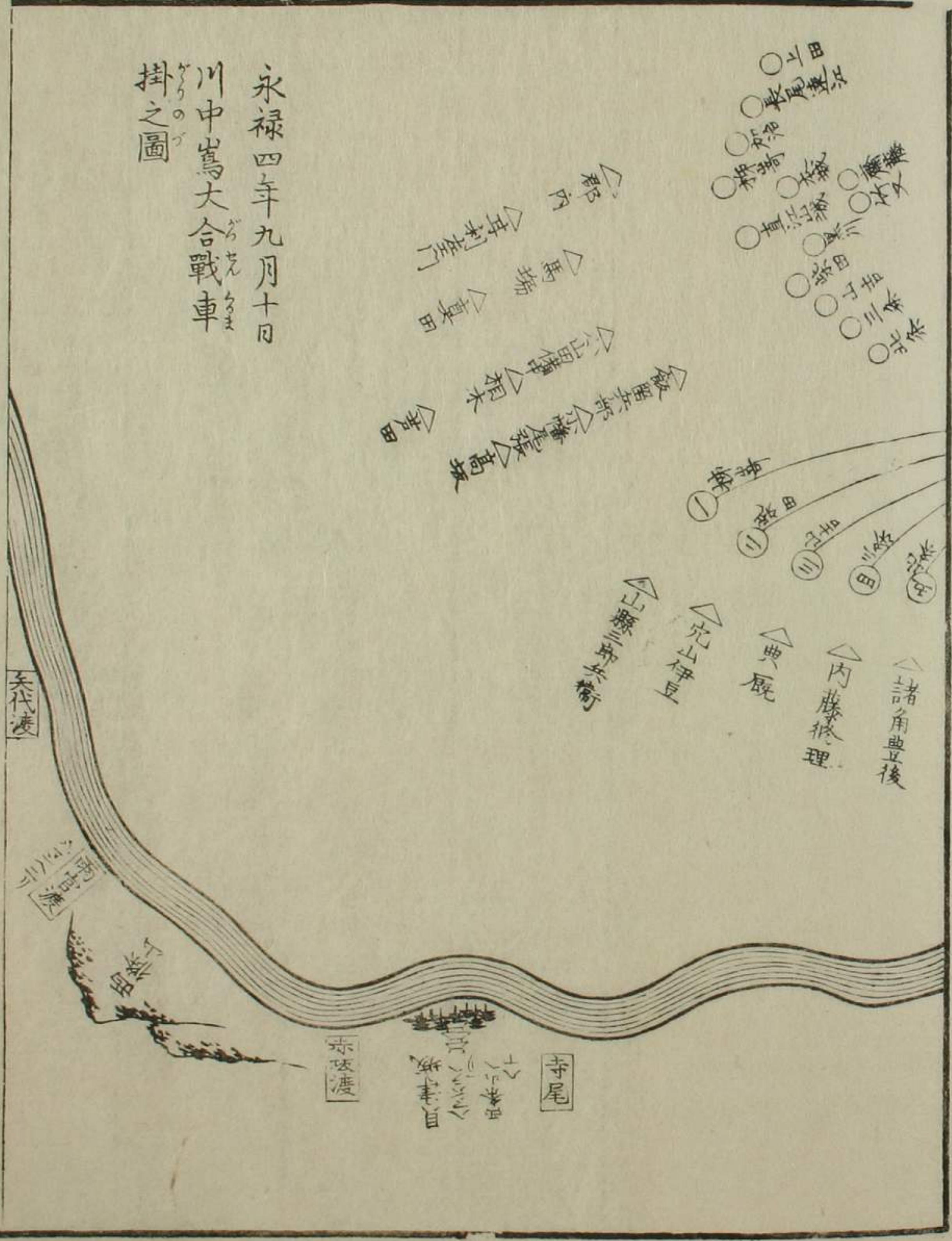
西条山小ら謙信宇佐美をカマく曰く明日は夜の内小川を渡
り信玄が陣近く備へ明方に籠守を討つるを破るるやづらあつ二つ
乃間小勝負を決せん敵大軍かれども今勢と二つに二つ
ら砥上より吾陣の後へ出るはく敵の大軍前後ふけ味方
かきつ途を失りん今敵人数を分け小勢ふりたる弊
棄く逆寄せを敵思ひあつたる左備かたつて乱せん如何と
かね砥上よりとりし勢はお尋を待たれ急に戦りんと思ひ
よう守あつる所と不意に討つる利を得ん宇佐美云その人殺
を分きたる事めやして知りぬや輝席曰吾對陣するに於
夕昼夜敵乃陣營れ氣を見る昨日やて相氣且夕に時を不違
あつは小今日如例未だ中刻夕飯の煙管中以上り又申の下刻
小營の幸に煙たらし守り物なり是兵をつらして砥上より
人殺明朝の狼を用意する事鏡あつるがさやと其勢はつて

けり以前運寄せ勝り疑ひなり宇佐美覺之に碇と手と打ち神
妙なり其古傳をきく然る時小取て用ひざるに不知小劣なり君
く内を附け半良將なりつれに下知あふしやるる方小れ
つて夜中に川をわたりて敵ら陣を張り曉小園を揚げ討ちと
拵く車懸ふ打ちつる

海津ゆき軍評儀も區ちるが入道道鬼が軍配ふ二萬れ人殺を二
万二千西条山へ也明日卯の刻は合戦をとりて久敵勝るも敗
ても退りてころと内旗本組衆廣瀬を流く横合に懸りて前後よ
り戦ひ敵をれと引立ち勢味方の待勢と追駆る勢とゆくは勝利
料ひたりや中上諸將尤と一等して西条山へ出る先陣小寺
高坂彈正飯富兵部馬場民部小山田備中甘利左衛門真田彈正
相木市兵衛芦田下総郡内の小山田小幡尾張以上十頭人数
一萬二千あり本堂より上り四の平三の平を越り西条山へ向ふ

信玄の十日曉小廣瀬の流りと越て八千の人殺と八幡原の巻に備へ
先危の一た者を待りしふ南者より告来り、輝虎一弟三ふ計の人
殺やく近くと信と申上り此時信玄少も騒ぐ床机に居り宣
ひるの吐自謀り、數多れ内其一術も當たり浦野を呼へ敵乃備
を見切らせ退散さんと宣ひる浦野民ア在る云境を脱ぎ高紐に
掛法前より立ち出りいふ小民於れ東門敵の備をよくと足て是れ汝ら流
石功者なるそと宣ふ浦野護り兼り頼り馬を打乗り馳行つる
はる、龜よりく内床れらるる大音や敵ら逃やと見えさる
犀川れ方へ赴けり信玄を流く扱逃るといふ道理如何さんい敵
備を張ると様ふとて一々らさるる見ゆに思ひの外陣に旗の色
赤く越後れ方へ靡きとい例の張引とていふと大音みく内面を白眼
む信玄いよくを流く流石の浦野とも覺れ事とやその邪やれを
車掛とて二の手れ救をきくは勝負ふも構つて將と將との雌雄は

永祿四年九月十日
川中嶋大合戰車
掛之圖



決する備かりをせよと此車かてを停める方便をせん庸將の如く
所にあつて勸めよと濃機くで宣ひけよ山本勘介市前
畏るいふ入道歌の備と車掛りを見ゆぞ汝急ぎ馳むろくは備
を止免よ其を繰替方先陣の者どもも使教多遣しては道程を
知らせたりとてのさしひきる 下畧

抑此日此戦と川中嶋大合戦とて後世までも名たろく一月の廿二
日いつろく双方討死手負れ負教お知せり武田方ふくろ
は舎弟丸馬介信繁諸角豊後守初麻原五郎三枝新十郎をそと
一偽くれ来配免の物多三拾き人悪軍の討死四千三百八十人手負
量難し手負ざる者三千人小豆ら討死の外越勢壹萬六千人此
内手負る者三千人残壹萬之ふ人手負り越後方志田源四郎
大河駿河守荒川伊豆守宇野左馬次備くの抽刃廿八人討死り悪
軍れ討死三千九百人手と負ざる者どもも直に小荷詰りて勢と甘

糶近江守が手又西条山口に残しとる勢と都合四千二百人無底残り
六千人餘と悉く手負り又勝敗武田方六分れ換上杉方四分
乃負たも諸家少く色く評せやれ
かほ乱軍れ打ち謙信の誰支る者かたも信玄の床几らりて討入
給へども法師武者六人並ひ居る山本太林と中の床几小腰けり
在りれば是は信玄なりと思ひ只一打と討多ひり切先を討せし届る
む此時六人の法師みぬた刀と技向ひれば謙信の推来なり
と大喜に宣ひしその猛威小辟易して逡巡し進む信玄と謙
信剛將なれば立合の勝負いふと思ふ知れば顔あく居給ひし謙
信二を刀り山本太林をうちり太林引外し退る其切先信玄
乃方へしりし故鏖の軍配團扇少くもひ除るひし謙信差
斜利刀ゆ切先一寸ちとる扇切入り此時原大隅と青貝柄の
持槍少く謙信を突んとけ放生月毛の名馬鎗彩を見く通

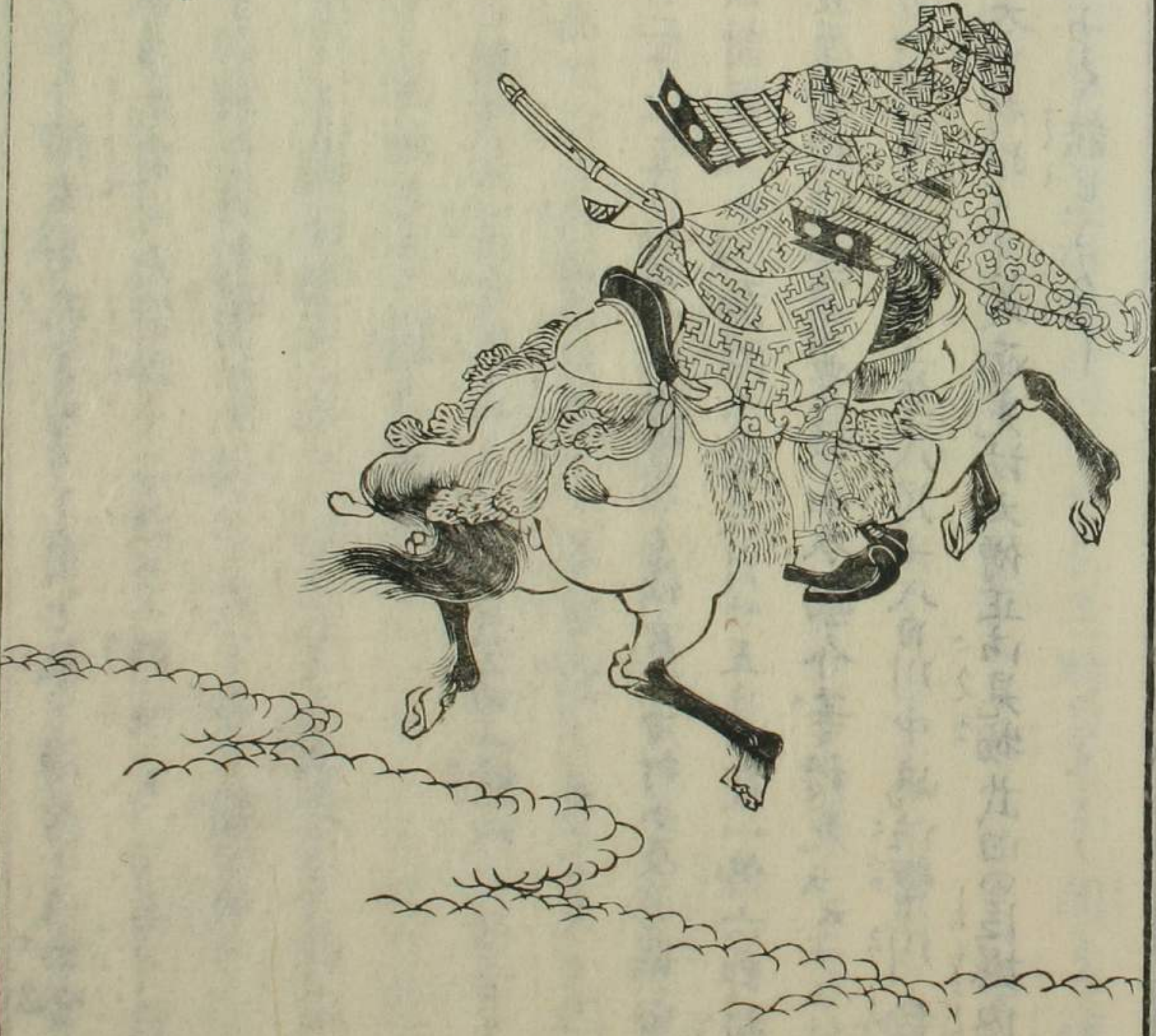
川中嶋古戰場を
 巡り折々懐古の
 感情限るれ天地
 老く山河更なる
 帝争つ々州本腥
 一を口をばし侍り

過川中島
 昔時酣戰地今
 日夢中看二水
 依然在薰風六
 月寒 華庵



全前
 元是英雄酣
 戰地
 函山雲合雨
 冥々
 須臾雲散雨
 還歇
 萬頃平田種
 稻青
 詩佛老人
 甲信英雄血戰衝
 急流如矢射雙驅
 於今兒女遼來話
 凜々威風在畫圖

幡野氏
 源忠孚



驅れりし母のくち信玄を大平なりと目と配り謙信と出合
かれ様ゆとせし左子元定らも突外一二度め綿嚙きく志くうふ
馬の三頭を打たせし放生月毛驚れ十間を走り出く踊り騰るに
謙信落馬し給ひしを越後勢七八十人引包むぐ立退り信玄
も近習と引具し半町をり退き給ふ

謙信太刀打の時信玄軍配固扇ゆく討死とて説非之信玄も
又太刀打り南光坊の天海及び畠山入菴眼前小是を見り
と云云 天文二十三年八月十八日謙信と信玄太刀打及び武田

左馬介信繁討死云云 弘治二年三月廿五日の夜一條六郎板
垣駿河守小笠原若狭守諸角豊後山本勘介等討死云云

本朝三將傳
謙信信玄太刀打の事天文廿三年八月十八日川中嶋法幣川合
戦の時雙方太刀打れよし足南光坊大僧正法見物武田の居堀内
権之進は供ゆく能見しりし

武田

藤田能登守曰我々元上杉謙代の者なり其時の事よく関し信
玄團扇ゆく受らるしと流石大將なりと譽はと語りたるは糧虎
からくと笑ひ信玄片手はく手細を取片手もく意扇を持
し吾輩と掛く切付る信玄太刀技よく思ひつり中く太刀技
隙をなすりしや謙信申さるつりとなり

○諸角豊後守碑

廣田村の北 傳曰諸角の曲厩の備れうごくと見く扁後共
田中在り

に向つてやけるはきの勤介といひかりしる詞もありしごとく止
まがれた所なりとて備を押しきるは是は道筋近き色はやかく
典厩小押続き二れきの様小傷なり諸長尾を陣を纏ゆる並て
直江少夫人の過半岸川小着ぬと覺し此時のゆく搦手くえとば
そや勘介入道典厩諸角三頭ゆく張出し足輕を懸け銃炮と打立て
曳率ゆく寄来る長尾下知してまの究竟の時節るる其と鏡
ゆして一子切又伐くゆり故を搦破とて呼つて今叙もかく出る

常ゆり長尾の我陣ふ二の手と添ふ事もたれ小今日思慮深く
して梯崎を添へられ是と一まれ梯崎成く葛直小押寄きり
我馬印の甘糟が陣に甘糟が旗と我陣小交へりい時下知り多ひ
るの惣旗を俯けよ手結の勝負に旗の探入の思の外れ僻事ある
ものぞ河原の風強きと直小と成りて備へるの勢も強きと
ぞ 此故に武田方よりこれ故にとて小馬中押立させ敵合近く成されば
朱の采配退取くいろ面く斯様は去還り烈しに陣の勢をかき
よ澄乃袖をひき敵の方と見るさかたを踏へ舞うに進むと寒声
を静小くすよと勇に舞る梯崎の徳信に越さきと真先小駆る
とこらに山縣之存を素ノへに押出さる小端々に出會互に余殺る
く碓と突合りるが梯崎が軍兵半破とく二町半敗りたり梯崎と夫
れと管つて服をも見どして真二文字に勘合が備へ驅付たり長尾
も透洞るく突く掛る勘合も是了と望祈なりと真先よ進みかゝる手

或記曰

勢与力足輕まで入道小後とや命限りて我より緒角豊後守
と内藤修理望月甚八つふ成く安を晴と我ひにがらりい急
から合戦あり守に味方と見合きべき隙に敵味方ふなり一が
勘合及今討死し結ひぬと即從者の告りよ如何なる故り者人扱と
遊まぬとぞと敵の中へ馳入る終め討死とるすれ
諸角豊後守昌清と前黄緘の鎧に糟毛は馬小騰りて大身は鎧をき
き山雨の味方を叩きさ安田が勢を遣控りく血相とく幾人形勢
適き武田小名を得り別將なり須田安田山吉が軍勢つめく勇かと
勵して三方より討りて諸角勢七裂八截小敗走とる後守及
死期と思ひ定め近寄武者二騎切く落し六七人よ手を負せり
心力勞き高松源五郎が突く鎧を受損り左の脇腹突通せば馬上
で落りと高松が即從深江八右衛門能勢治兵衛八等二四人馳来り
昌清が首を取て退むとる本を諸角が組石黒と存と米浪人成瀬

永祿四年
九月十日
川中嶋
八幡原
乱軍の
光景



吉を門訛来り討らる者も薙倒し首と取返し引退く

○武田左馬次信繁墓 更科郡杵淵村曲廐寺 本堂の脇あり 園内小大樹の松二株あり其中央小

高六尺をうけ自然石の碑東面に建 碑面 松操院殿鶴山巢月大居士

右 永祿四年 辛酉九月十日 左 武田左典廐信繁と誌あり裏小も文字あり

苔蒸しく見かぐし

典廐らるるを討死し思ひ宜むいをも信玄へ使を訛て忠告い如く謙
位をば其へ交留し穴賢其を信救の忠覚悟有べうと云ひは間よ
勝を心懸りきゆとかり信繁その日れ出立よ如花城乃鎧に淋
打らる兜を着し重代の纒紺地は法華經の文字書らるる掛るひ
今日と限りと思しきるや便解し臺に上げ綿疋ふけく鞍乃前
輪に括り付馬をさるうひふ乗り士卒以下知して曰長尾と見は組
刺連へ端武者と討て罪作る方歸命八幡大神今日れ軍に長尾と系
會させ終く只今もや討死して父兄れ恩を報むるなりや大書揚幕後

を指揮してたえける所ふ村上勢れ内より松本空めよとい鉄炮乃
巧手規寄り常とる門ふあやまる次信繁の服臺を打抜ば信繁馬に
耐得を真倒し落すを空め走り寄り首と捨く武田の長山寺
妙之助其敵を退蒐く討倒し侍中と取返さくなり

信繁れ馬と相摸黒とて殊小法秘藏なり一が法死骸の河とらと立
巡り近所へある人あはれ飛くる驛田り狂ひたり此馬を毎日米二升
豆一升直に飼せし其上手つら朝玉味噌一握り飼料
とるさきし由此恩を報むるなり

駿臺雜話

爰に足利氏の季世天文永祿れ頃小至る賢と称まき人あり甲州
武田信玄れ才左典廐信繁是なり近代武巧をれ尚ひく徳行をば称さ
さば故小信玄の名も高々れども信繁の賢らかくまて世に知る人あり
今翁ありつらばしとい誰かのひ出る者ありん信玄れ父信虎信繁を
愛して信玄誠廢するをありま故信玄父子不和なりしに群臣何

是も信玄れ武畧に長じたるを以て信虎をすて信玄小母の
付し信玄群臣と謀り信虎をすじ出しく距ぎしや
信虎甲州へ歸り事叶り信玄直々外祖父より駿河
小出奔して今川家の壽云とあり年を経るれども信玄は父
をむく國に入るも信虎後小京都小流落して一生を免終ら
信繁信虎の志子して信玄と廢し信繁をまんとするを以て信玄
も知りまるとは必忌悪むべし夫れ國小跡く信玄小侍たる危難乃
場なり父を逃し出たる人なきに露友愛の云有べし然るに信繁嫌
弊の向小居たり兄弟れ万少も連言あるも同き見れば久く朝夕
國小慄くやして人臣の命を失つて信玄といへば常に親任して
疑忌乃をなく始終一のまや其忠信誠実人を感享するにあ
りていそ斯の如き方なき信川中務め討死せしむるも其
尤義小らりて豊之侍る信玄一生の危き折るれば此討死せしむる

てつれ為ふ命と惜むれば主辱りめしむるは死を
子の義をもちて快く討死せしむるに誠小見危授命といふ
し信繁へ柄恭謹するおろそかき身を守るも嚴正しく假
初も汚俗に同せれば高風清節古人に耻さるべし又一案の
合戦小赴く敵近くたつて人殺を急に荒く遣ふとあり
是れ信繁戦陣小勇りり兵を也る熱しむる事を知
り然るに勇威武畧さへ兼備する易にいとゆる知剛知果萬
夫之望し此小類をいふべし嚮小信玄社稷れ慮ありて早
くけ人をまじく世子と監國の任に居しむる甲州永く滅び
ざらば然に昏昧剛愎の勝頼小傳へし信玄死してつれあり
織田氏れ為小亡さるるに事ありむや

○山本勘次晴幸一本ニ入道道鬼古墳明合の橋の辺りなり今千曲川に川欠あり今其代の北芝村に於此墓乃境内に移す

○八幡原八幡宮立るより此邊の惣名と云俗小水除むうい曠野なりし

今ら多く田圃と成り古戦場れ名のと残たり

○横田河原 上様田下様田と三村並ぶ 養和元年に越後れ城を即平資永と木曾義

仲と合戦ありし所なり資永四萬餘騎義仲三千余騎越後方敗走巴

女ら中三権頭が娘少く公に別れ力を強く弓矢取ても打物取くも健へ

○氷鉈斗賣神社 神名記 上水鉈村より

○川中嶋 千隈川と犀川乃間平田の地ありて信濃十郡れ内更科埴

科高井水内の四郡に亘るよ川々川中嶋四郡といふ天文永祿

れ頃争論乃地ありし故村里に古蹟多し篠の井追分に至りて

右京伊勢分道左の江戸街道に所立石の茶屋とて柳屋といふ繁

昌れ地なり是より程あく千曲川の渡口に出左よ世井宮右小唐

猫宮深林の中に朱け華表を右け後舟とて屋代宿小鉢るが順路あり



立石の茶屋

篠の井の五丁を

お針とて巻を

かゝ其餘の

散在と

間の宿と

つゝ

追分立石

の茶屋

柳屋に

川中嶋

戦場は圖并に

妓捨山は半切

寺をひさく

是より屋代宿迄

一里をり其間より千曲川

操舟の渡りあり

○千隈川 筑前郡 佐久郡金峯山の北に流出する始僅に鰯を漁む

佐久小縣を貫流川中嶋四郡に堺をゆく又犀川の駒ヶ嵩に出で筑广安

曇更級水内之堺を經る千隈川は尾合よりきてちくほ川といふ越乃

新海ふく信濃川と云凡隣國へ流出れ大川の水源多死中丹を此川を

當國中より大川之扶桑略記曰光孝天皇仁和三年七月卅日信濃國大山類崩

山河溢流六郡城廬拂地漂流男女牛馬流死成丘云近くへ寛保二壬戌

八月一日千隈川洪水溺死するもの數千人此水災六郡伊奈流坊筑前安曇水無事 仁和

中の記れど一略記乃説も此川ある一古郡に流る川なればなり

万十四百 信濃奈流知具麻能河伯能左射礼思母伎彌之布美氏波多麻等比呂波牟

新統古今 悪代ちくほの川れささるの昔むす忠ありつくはまて 式内親王

雪玉 水のくみ降もつとら千隈河ささや峯の雪ふかむむ 道遙院

風雅 千隈川美ゆあらすにけり清ていけりけり雪 順徳院

幾ヶ山嶽といつる甲斐の國にありと未詳獨ハ嶽とて指不あるふ似り

ちくほ川 春ゆく水也 銚志 其角

種ひく青れ千隈をささる 鶏山

千隈川の螢を名物といふも古奇に及べし初秋上旬頃數万

のゆる水上に群て傘れ周囲をふ圓く成り昇降するを數回終ふ

を河水へ烈しく落く八方へ散れされや毎年毎にわたりは狸

俗是を螢合戦と唱へその夜も見物乃童男童女群集する

とわたり水と毎月中旬其螢をふるふ大さ五分ほどもあり也

千隈川の螢はささ石乃玉と光を飛とせざる 利忠

千隈川の上川端盤古社といふあり又高天原下廣太の系あり

神軍をといふ事と祝家れ魚んといふ物伝ふ又相本谷小宮社

の跡祝部平宮丁をこれ地あり按本郡の諏訪の域之疑あり

伊勢津彦の神乃身をよせり地あり 林代の府伊勢の根田彦のよりあり

神武帝東征の日天日別命とて突兵欲殺之二神畏依りて

齋て住 齋て住 神武帝東征の日天日別命とて突兵欲殺之二神畏依りて

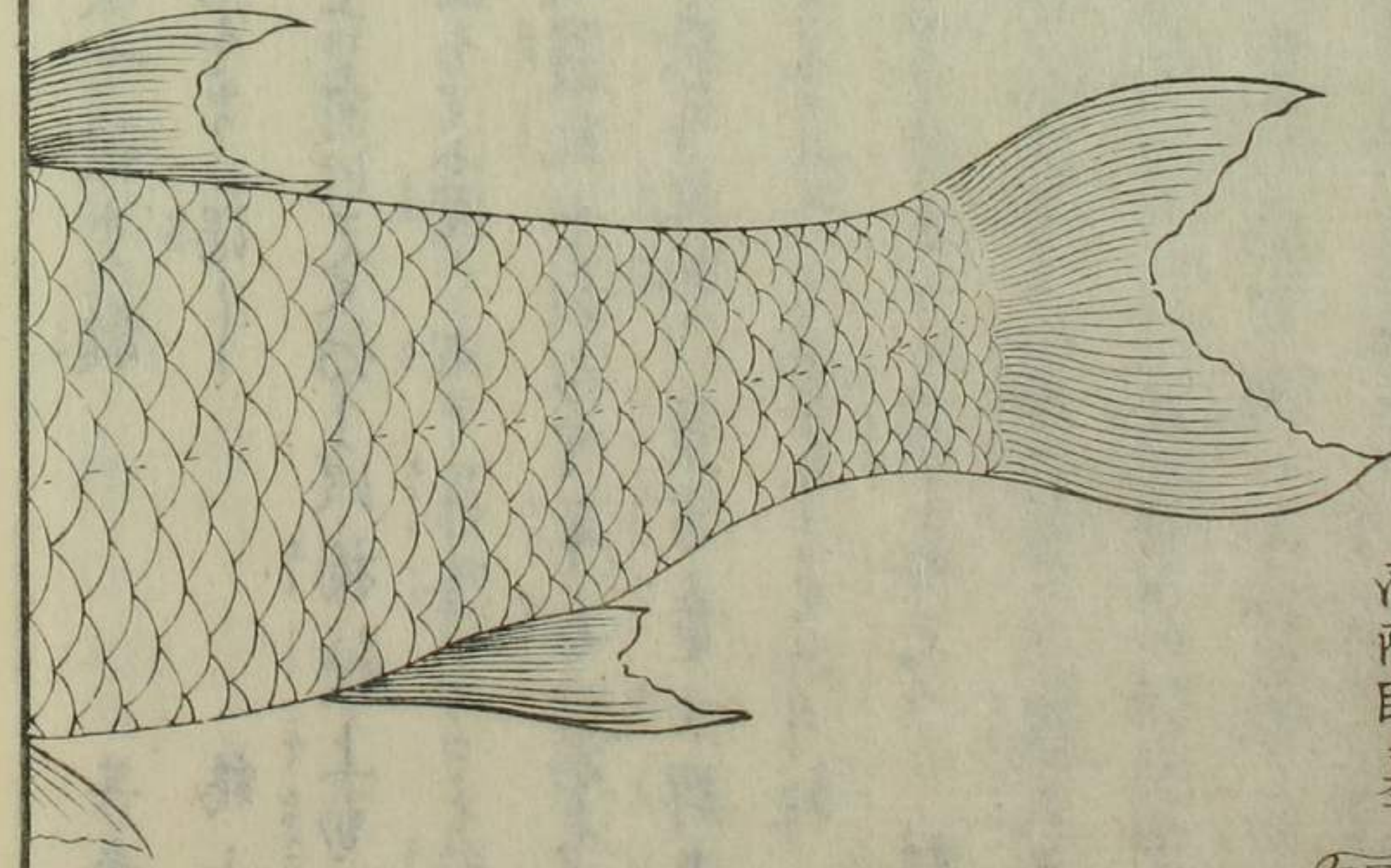
齋て住 齋て住 神武帝東征の日天日別命とて突兵欲殺之二神畏依りて

齋て住 齋て住 神武帝東征の日天日別命とて突兵欲殺之二神畏依りて

齋て住 齋て住 神武帝東征の日天日別命とて突兵欲殺之二神畏依りて

千曲川鯉魚寫真縮圖

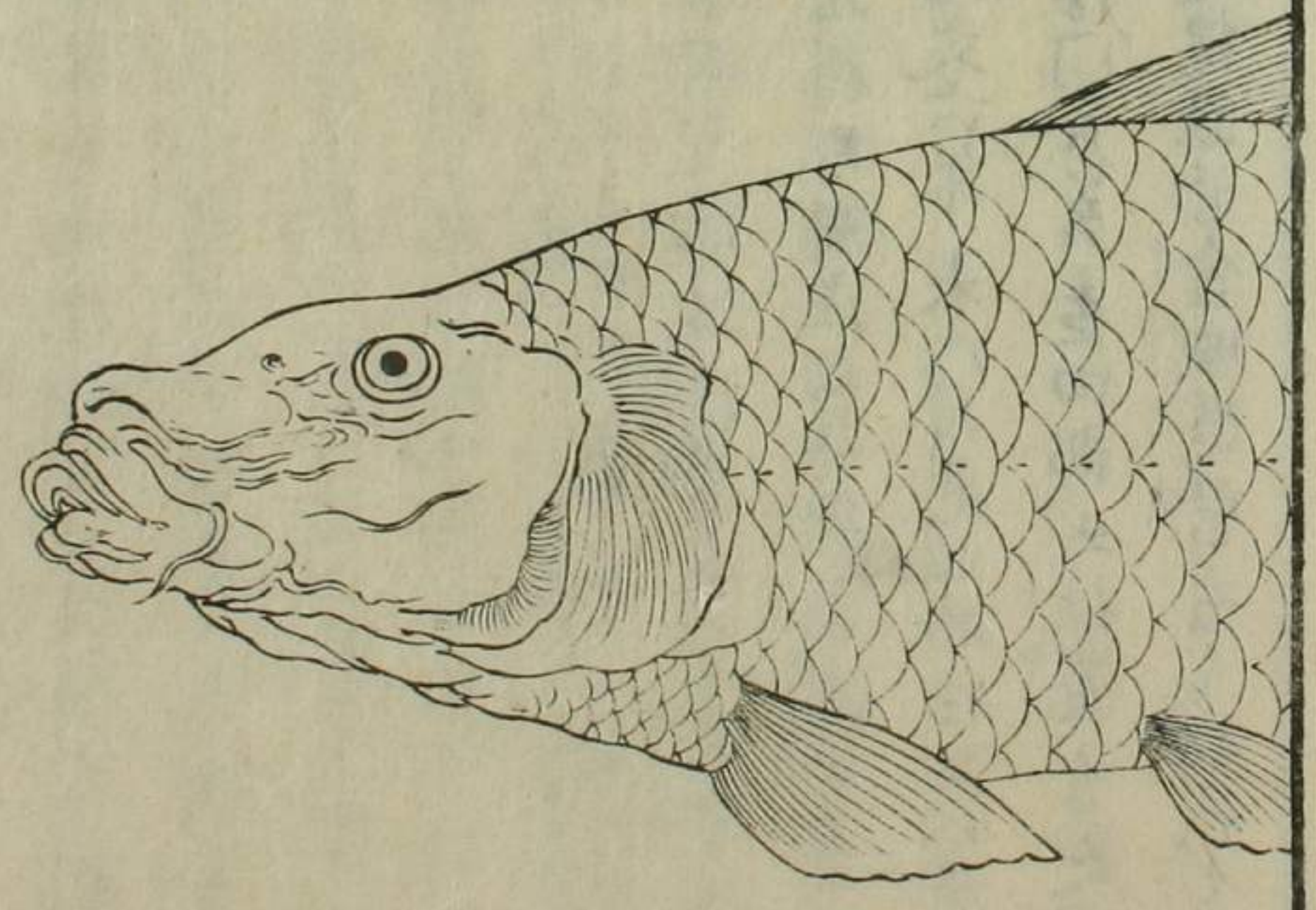
予南陵加川と此國と收蔵
 せし偶善光寺に詣りて道
 川中嶋より旅店松屋某の家
 小憩息し前庭の生洲を見
 るに若干此游鯉洋々焉とて
 其所を浮くる如く其の
 此他の鯉を人の雷ふ應に
 下物とにまことあり小枝人
 の子産を欺るること想像く
 言さそて食らんやと禁むその
 荒鯉といふはつらつらそのを
 尋らにありしれ指さし教へ
 めといはれと此國のまこと



南陵臨摹

信呼堂水繪
 自号南陵氏
 一醉漫揮毫
 勿為書風史

此荒鯉の首れ形畧のくく尖りて
 惣躰に銀光ありて尋常此鯉
 鯉真鯉小異なり頭の尖まること
 赤鯉小類せるものれありて又いろ
 病人腫えあるに鯉魚湯を服用せ
 ば果この鯉を用之れ志すされい
 けに功驗なり世醫是を研究せ
 るて波鯉を以て製し病ふ
 振つる者あるを依圖く謔なりと
 語さる予便嗜息して以為嗚呼
 已哉庸醫の仁術とること解さ
 る猶如斯乎故今因ふ此圖也
 此小説を掲ぐ醫家の病瘳
 をして病家を過つてみたらんと
 希つる而已



國を奉て春日部河内國去伊勢津彦大風と起して信濃にさる

○西条山 又妻女山と出の傍にあり山脈 永祿四年上杉謙信川中嶋出張乃時陣

跡あり跡今も井戸を遺すと九月九日夜海津より夜討を懸

れ先陣高坂彈正二陣飯富兵部馬場民部小山田備中甘利左衛門

芦田下野小山田彌二郎直田一德齋小幡尾張相本市兵衛等合せて

十頭惣勢一万二千唐本堂より登り森の平大嵐乃嶽を越へ四の平三

此平等嶮嶮路を經く西条山より到る時と曉たりや

○松代 古名海津其後松代とす直田侯の居城なり十万人を領せり哉田佐其時海津

と稱す海津軍學 寛延四年辛未撰び海津往來といふ文章あり

海津往來 折南膳部列大日本信陽埴科郡縣庄松井郷藤澤里李代海津

と往昔清野後屋敷と天文六年未八月武田晴信に屬し小山

田備中市川梅印原又左邊門を置る並四郡之仕置有之同十二年

良弼山本勘次道鬼入道繩張る金城造管有く松代と号し

人皇百六代後奈良院將軍義暉公之御代なり此節本城高坂

彈正二の曲輪小幡山城守在城なり天正十年織田信長に隨ひ

森庄義重政八九十日居城今年七月上杉景勝に降る入関田

九及在城同十六年森右近大支忠政居城此砌檢地有く同十

八年松平忠輝卿持城代花井主水を差並其後二年條河

料所なる平岡正雲法代官所なり慶長六年松平忠昌同十三年

酒井忠勝元和八年忝清和源氏滋野天皇二十代直田大守

信幸賢君御拜領從上田侍入部 下畧

右の手おの児童れ双紙たり一紙抽出く爰に贅に

○祝神社 式内祭神玉依姫命 例祭六月廿二日山車七輛渡子綱引の者皆法

被編笠を着以古雅なり是を挽納く後藩中諸士の馬騎あり

○蓮乘寺 海津城築立より此城下に寺あり依く高坂浮城裏より

時甲州より日蓮宗れ出家来り一畝留置て建立させ安国寺と号し



芝村
 阿弥陀堂
 山本
 道鬼碑
 古墳の付死ヤ
 八幡承に有ヤ
 川久少先年
 爰に移ヤリ

今此紺屋町魚氏の屋敷あり寺形その川の項より蓮乗寺と改め
 一や其後今此處に移アと云々此寺に位牌あり性喜院道々
 日寛 兼應二己年十一月朔日とあるヤリ 是に加藤清正家老加藤丹波といひ一人の牌ありとぞ
 山本勤々晴幸 一本 入道と鬼塚 古墳ハ八幡原合け橋の邊にあり 今第跡田圃と云る同村長谷川の水に依り今六松代此山芝村あり
 甲列武田家ハ軍師たり初ハ三列寶飮郡牛久保村 寺ハ寺ハ摩利支天の小像と
 安を 安を 小接と躬隴畝小耕一或時ハ列國に漂流して専ら軍本を鑑ふ
 まる天支地理を曉し韜畧と諳ん胸中に八陣法畜へて天下乃
 安危を餘所小親く其牛久保に塾をそのあり天下二十四將の其一
 甲列の大守武田大膳大夫晴信駕を托く是と顧ふ幸三度小おらび
 人を屏して籌を精好する事日々に密たり家臣遠山右馬奴板垣
 信賢等悦びを晴信曰我小勤々有る魚小水あるがごとく再び言と
 復さるるたつとと宣ひ既ハ出陣あり日教僅に十五日此間ハ佐州
 小放く九城を陥もこれハ軍師の計策小據まり或人云和朝乃

臥龍明の劉基小比也んや其以名高れ竹中重治穴山樵雪真田幸村

山本勘未兼八太平右京大夫内山本勘介同勘十即牧野
備後守内山本勘左門是亦正統元年の説あり

紫田因幡守勢山本を討取んと附募ふを勤み屍同小見るが少

らば宛期の戦ひせんと完ふして馬引寄せ徐くと圍を下て

けさば紫田本庄是とるより引包て討えんと咄と喚つ

討て驚る入道竜雲を馳が如く柴田と一鎗よせんと突進

本庄は道鬼と討取んと蛟龍の逆浪と拳る如く大地を夷く我志

以本庄が従率江間五郎太夫走来く横合小突く是を捉んと刃を

も斬と左馬介躍入山本が肩先を打付入道拵に透る馬より

と落しうりと江間走りあり押へて首級捨りける 下略

抑芝村の阿弥陀堂へ尋常れ堂にわ社造りて萱葺り往昔

何この神を祀りあや今神主吉澤氏物髪ゆく傍に居住

阿彌陀堂といふ所の頃より唱へ来る歌いこと詳なり今其四輩の内

々稱号其四輩順拜記ふ其末由と誌せり是等と詮とせん

○高坂彈正昌信塚 松代より東一里岡屋村
明德寺裏の山あり 高坂彈正は越後の押して海津

小在城一甲越和睦乃後病死君の為國家に誠忠とて一甲陽

軍鑑を著り文政十亥年三月九日二百五十四の遠忌より憲徳院殿玄

菴道忠大居士と号し竜潭山明德寺に禪宗を高坂の岡基 保科村属
龍徳寺

永禄四年九月十日夜亥刻高坂彈正は信玄父子と海津の城へ入

奉り諸卒へも支く兵糧等念入贈ひ其後我秘藏の士平山出

羽を近付密に私語るは上杉武田の弓矢を今日限り此後上杉

より一向は手合しと有しうと我君信玄よりも遮ては取合有

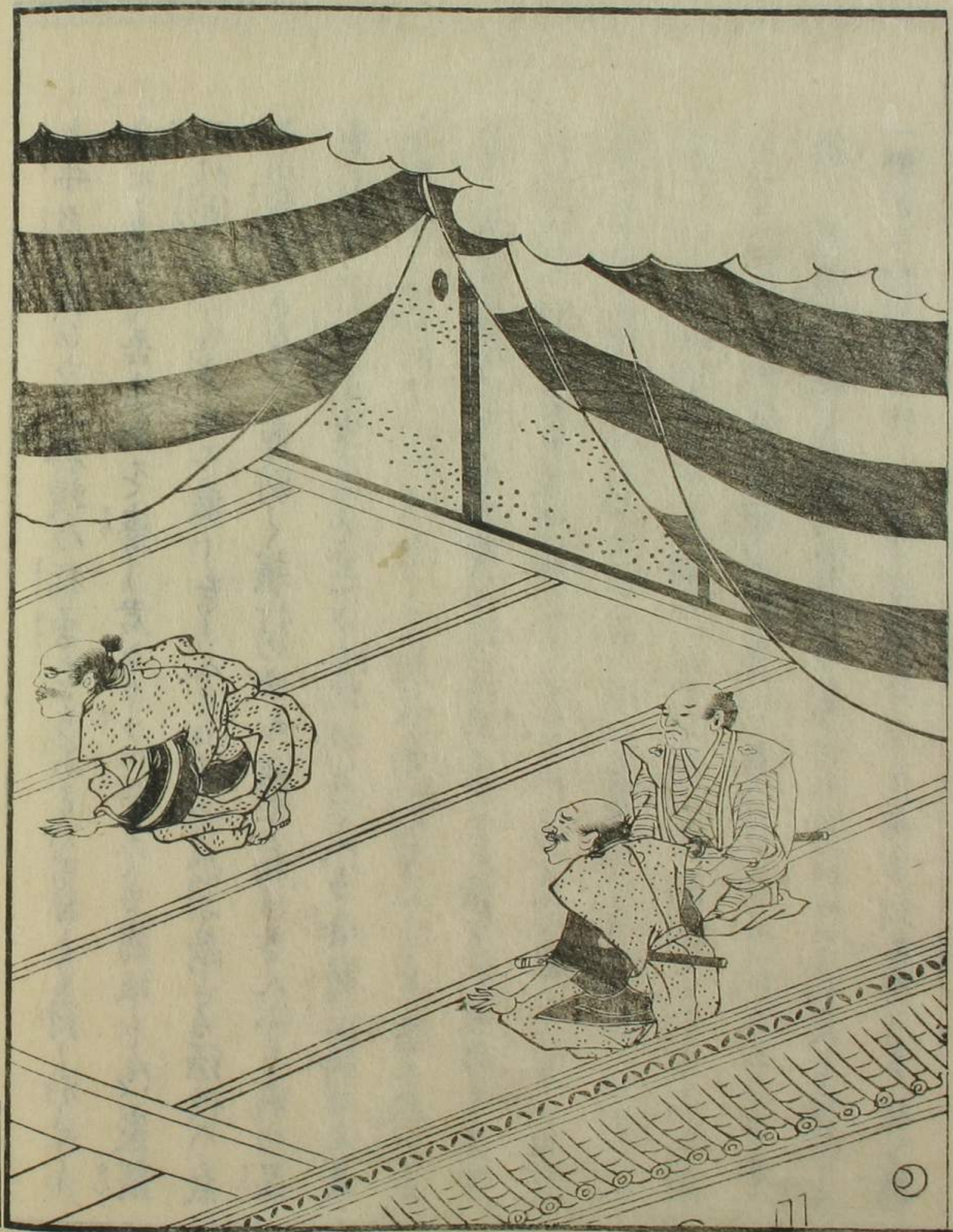
ゆり終り共吾數年來此城に居りて越後勢と一度も引交は謙信

某を責給はる事い高坂が武勇有ふをあらは某も謙信の法を

取受く謙信潔白は意地ゆへ吾尺寸の謀言に乘給ふやうなき共
退て後未の利害損益と委論する時を信玄は病身少く志を
清年倍なり謙信は勇健めて壯年形りを老少不定れ世の
様なれども先は信玄は祥世よく謙信は末永く世を知り多
必定り武田の家督太郎義信智勇れ大將なれども近年
父子の間よさぬくれ模様出来呉越生ると見へる事乃
あつ時を家督二郎及三郎及は病身をきへ四郎勝頼及と
きりには命及生立いうみも手荒き猛將希代の若君なれども後
年謙信と弓矢を好む人節のそ謙信ふ比まき今武田上杉五度
乃戦ひ云度たつ味方十分の敗軍大將士卒残るく討つべき強敵
なきと我君信玄仁義信明嚴賞知廉の八佗を自然と傳へ給
ひ士卒君の法命代り傳恩をきくゆりべと陣中れ法嚴對海
の隊伍正しく奇兵れ機変古今と無雙の大將なきべし謙信

と牛角れ歎ひかれ勝頼乃猛勇をりあつる百日とも對が
爰をり門く吾未終を察し君をり人跡中ても高坂と法家盤
石れ固と成く君恩を報くまんとゆりゆ故ふ敵くる謙信乃氣
をい取交へるは節別く謙信の法を後を和らぎんちを戦の果
きる法をり入大幸るも其方と塩崎色又も倉科三郷の人夫
と驅出し一箇火十分以用意して越後勢れ討と尸骸を引分よ
定く越後領乃土民等臨時れ追立夫来て尸骸と引取な味方
と領国なき二日五日延引してと苦く先敵方れ手廻能く
肝煎るべし切つるは謙信ゆり吾と賞美せらるる後手は
何さつる私徳ふあつる君への忠なりと委細ふ中會平山出羽
と名代回報ふ出猶又駒沢新左門戸田信俊今井清八三士を奉
行と戦場へ遣し塩崎色又も倉科の郷村より人夫を驅出
一軒より松明一本持お馬持百姓と馬を引おる戸板を持

九月十日の
 夜中に
 高坂陣
 家士より
 戦場乃
 討死
 寺と引
 らしむ
 む取



系とて勿論その佛に依り鳥目と波と一と觸るる子の刻は
隨々集り遠近村々も子の刻に馳来り十九百人の御民出々
上校方まで甘糟近江守より越後へ觸れけり翌十日夕方
より二千余人の人夫を催し甘糟手組波越十郎左馬長堀方八を
奉行としてその外役人左添戰場に出く高坂方此役人と式臺一夜
中より始り越後方此尸骸を福を賣く隨々に積置十二日昼迄
ふ引分相濟し六尸骸三千九百人一吟味して両方混雜せざるや
に引取ると上校方人馬不三たりは高坂方より馬三百匹人
夫八百人貸し引取けり

他國より新様なる戦ひの法を其夜より武具馬具弓銃炮を丸入
らりて郷民に申に及び野武士乃類ひ集り討死此死骸を裸
にむき乱取るとる戦國の風俗なれど武田上校の弓矢わ
そひと軍果ると雙方より郷村の奉行夫々支配の小人頭道

作りの黒鉄其手組を引具一夜中箭を燒し以断を立尸
骸相印等を吟味し中にも死果さる戸板一揃ふ載せし引
えけり今度越後方大崩の退口ゆゑ手負多く帰陣の後死果と
者子七百余人と聞えり痛手負し志二千三百余人是れ士
分たり雜人並し小荷駝也一人夫七十余人と數ふ不入武
田方の領國の事も人馬自由めて早速に引取たり實小並類
ある戦後此作法弓矢の修慶とそゆりて

此度西軍討死引分高坂彈正厚く世話つてし辰村崎和泉守披
露しけり謙信殊乃外喜悦ゆり誠心彈正と百姓なり一伏
信玄取立らんとり其眼力遠くを流し士なり高坂方へ使者を差
遣しゆく中謝とて一度高坂を軍外乃志疎なるはつ川ゆく
と越後へ用事ありや越後と中遣とて其方も相分得高
坂より中越用事有らんゆり手前をさても早く達しきまべり

や仰渡さるる甲別方死骸も四千三百八十人隠し引元川中
嶋善光寺大室大勝寺甲別長谷寺惠林寺等にて討死の吊
ひを付侍藏より法令出さく丁寧の供養あり武具馬具赤子
共孫ども見分させ皆ゆめ法施小納光さぬ多ひければ討死乃
妻子ども是を感し連きなる討死して法用小立侍屋形様恙なく
侍取陣の版奉望乃至り其魂をの懐ひて中と年頭五節白井
如く互に見世式臺しつらしハ乱世といひるが希代の風俗と謂ふ
一是ちうちかろく侍玄れ罰を軽く賞の母り威權卑く仁徳
高く厚れゆ急を知らせり

○永禄七年八月對陣乃節武田より上杉陣へ使して曰天文より永
禄まで都く十一年合戦暫くも止時中一即従家子倍臣多く滅び
執中當所の士民安堵有りか所を去るを馬非人と成り道路に骸
死も其根元ハ両家武威を争ふあり岸後土民若干を救ふと不

仁るうあられ軍を止め川中嶋四郡何ぞも属せんや所詮明日
互に陣中より勇士をへら一人づつ若く細討の勝負あり中嶋と
片付以後戦ひを止交を厚くせん法同をに打ち明日と期せん
中入直江山城守輝席は告輝席老臣小議を宇佐義進に出
て云今日日本ハ英雄蜂の如く起る中武田上杉川中嶋ハ久我戦ひ
甲別ハ大軍味方ハ小勢備間原ハ共君と侍玄ハ両虎二竜の戦
ひあり萬騎一騎に成るとも勝負付ゆと存け侍信玄の不望
に侍ひ勝負片付近圍の小敵共を討挫き手弘く勢ハ驍大あり
大敵侍玄と挫ぎ給ハ是根を強く帯と堅くはる大魚躍るとんく
をと棄て小魚を漁るが如くと云輝席むと同日侍玄の望ホマセ使
を飯基叔上杉方勇士と選り齋坂下野を為末内長谷川与右ハ秋を
定む武田中ハ安間彦六弘重ハ永禄七年八月廿日兩陣勝負を試る安
柔出ハ長谷川宗生ハ勝負何方侍り共収させりハ為末代子矢乃

飛渡さるゝと長谷川組で下るふと打たれと按安向ヶ頼のあつと差
甲州勢掛らんと信玄制してより不運なり以上約を交する小あし
もと是より川中崑城後領と成り人救引れ安向ヶ息跡熱なり知家物
頭に取らるゝと長谷川も又上松加恩あり

松代より関原村へ行ふ炮火山の南より樵路を経て皆神山乃麓を巡り天
傍の古城山と巖石聳へて雲上小秀ると左に眺免野径を郊行し
く明徳寺にゆき拜西の具足鎧騎鞍重什物とい高坂の碑へ寺より三町ほど奥深林
陰涼れ地小建り嗚呼此人や春日大隅とつゝる百姓の家より出く
甲府小膳用せりとも勇敢へ更あり義智を以て君家と補佐し仁礼
と以て敵將を感動さしむ生涯の行状想像とく石碑を撫つ無端
に袂を濡し懐古の情頻し胸を裂く折々山寺れ入相乃鐘小驚の
ささく本末し道を急げ州産集世れ中ひよりや歎くわらゆけはれ
と山小も人々位々をわらひささみく其夜も屋代宿小止ぬ

埴
科 矢代

埴本三里昔ハ社
又屋代も書レ

八丁程相對して巷とあり其餘町裏に散在して農
家多し此宿一重山の麓あり西浦と千隈川北流き

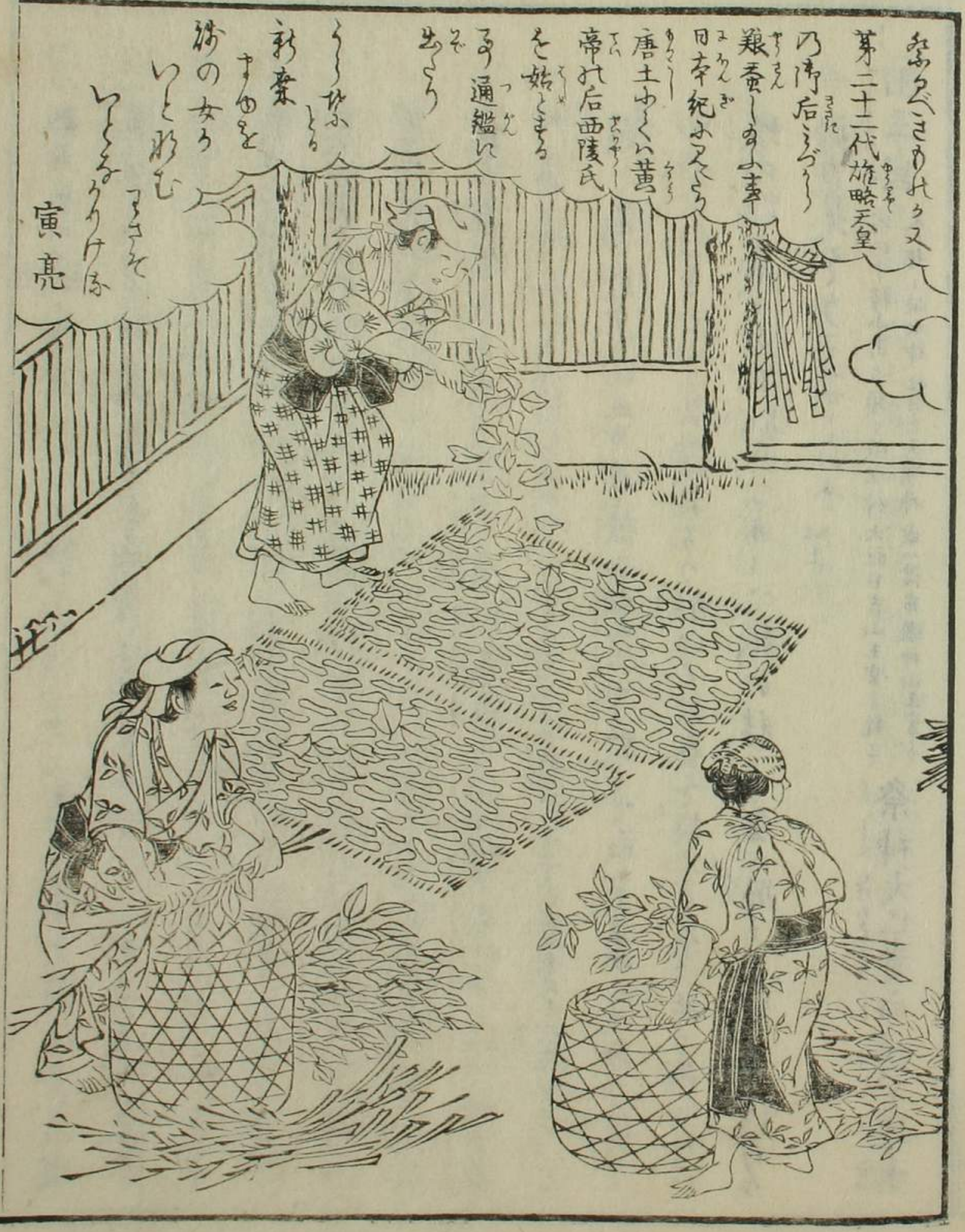
地名攷

按三代實録貞觀八年二月矢代寺預定額云或云社ハ屋代
上古れ時と地と拓ひ齋場を設て神と齋祈る儀あり其の齋場を
ユミバカといひしと齋場を屋一落といひし齋場りく宮殿子代

よりけ義あり右屋代をいふかゝりしなり

此邊養蚕乃家多し本曾れ山中其外山間の田畠少れ色ハ是を
つゝるみく世と流る杖とさるも又優し折々繭の揚り前とて家毎
小圃りくややる姥小女も佳と素の持とらび松が枝の折登るも
に携へて故郷まで又訓わ産業も又流るるり其養蚕の始末を関に
蚕種の紙に産付くるが春穀雨の前後小生と出ると帰るといふ既よ
帰出く一番の暮るる別ら折後へ入来れ桑を細小割くわると是
を黒子ともいふ共いふ又蚕を桑を走らるゝ食りぬ幸回度

夫耕織此二つの者天下の通
 養育て男女辛苦の身に成り
 夫の教を耕一女の養蚕して結
 を繋げ李紳が農と憫む持小
 錦糸日當午汗滴禾下土誰知盤中
 殮粒皆辛苦又無名氏が蚕婦の詩
 昨日到城郭归来淚滿巾遍身綺羅
 者不是養蚕人とありちよと織者
 と服だけ耕者の餘の食料と
 つる古言とあつたあつた方
 もゆりー
 蚕は神をあらはす日本のゆきを
 致ぐまの軛遇英智の神埴山姫
 小逢て稚彦靈を産む此神の以
 り蚕と桑とをれてと神代の巻小
 又とと本胡とてハ統考と



おろくさのれく又
 第二十二代雄略天皇
 の清后とて
 艱蚕一のよま
 日本紀よ又
 唐土ゆい黄
 帝れ后西陵氏
 を始とま
 る通繼い
 出
 新桑
 糸ゆを
 務の女
 いとね
 寅亮

あり是を眠るも泣むも体むもつ二度目の体を高体も二度
居ともたけの体共つ一茅二度目の体とふたの体といふ熱く体の附葉と
あてぐる其か減りつ二とわれ体の後次茅に大ふり儀く多く
成ゆ急外の竹箆すれお小移一葉の葉を割く製するにいつふあ
茅四度目の体と大眠もゆこれ体共つ二と追付起出へこの附を伺ひ
共用意をなれ既よ大眠起して後の葉をくるるす前よりいつふあ
葉を採製するもつまらなく開一蚕繭と作る附とを子といふ廣き蓋
乃類小推柴すのおとあ入くひこりくる蚕とをくそ末を覆ひあく
繭を張らんかり四五日して後まゆをつづ放して取り繭をちかす
つ二蚕種をこころのハ族物より形の上の蚕を撰んぐ糸に括り釣かけバ
蝶の蝶小成出る牝牡を二あして紙に後一をば脱く子紙産はける
おり是をさうま子といふ以上

○山王宮 宿の中移ふあり須岐水神社日吉山王宮と稱す 又八須岐水神社日吉大明神或ハ波布離神山王宮 祭神大己貴命須岐水

神事代主命相殿七座 固象命 豊玉姬命 速秋津彦命 速秋津姬
命 少彦名命 保食神 国常立尊

。本社一宇 南向 四間余 棟札 延長二年甲申八月神主竹田右守太夫

。幣殿一宇 二間半 拜殿 三間 行事殿 二間半 佛供所。神水井

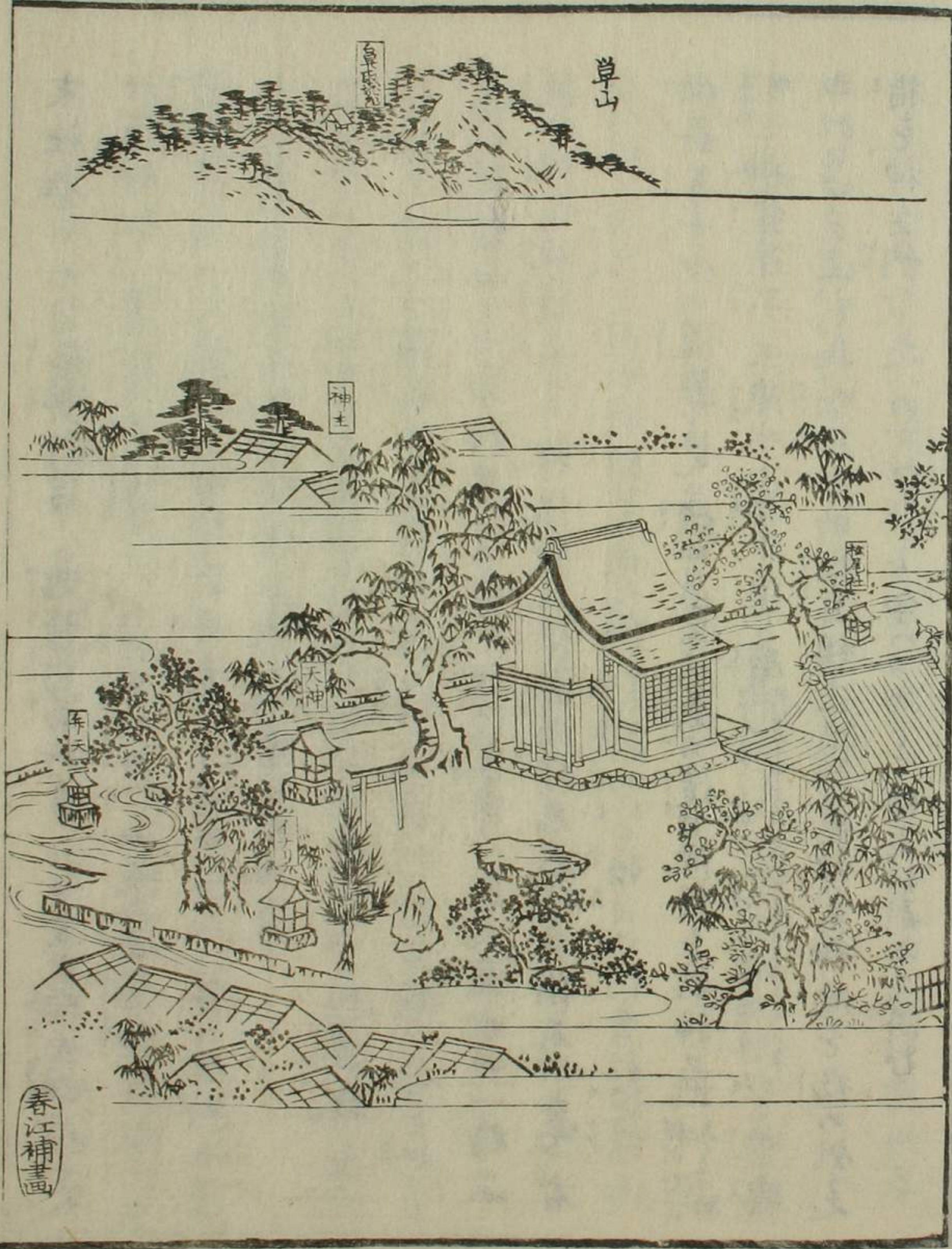
良の方。影向石 乾小。石鳥居 高一丈三尺 明九尺

△神寶。水玉石一。縮玉一。子安玉一。禁厭比禮一。蛇の比禮一

。大鏡一面。神鏡廿一面。廣鉾一振 水内郡倉橋部 廣人寄附。長刀一振

。騎鞍一口 酒井宮内少輔 寄附。弓一張 矢一手 菅郡兼井村 村松土佐守寄附。御椀 本堂 故六連鏡

△年中行事 正月元日より七種迄天下恭平国土安穩の祈念執行
但御年越行支傳來古例音樂神歌用之。正月十五日 蠶祭。同廿日 草禁
厭之事。同廿八日 疾病除の行事。二月八日 水神祭。同十五日 崇神祭
同末社祭。廿七日 鎮火祭 神樂揚湯行夏回星祭。三月 花祭行事。四月初申
の日用水大口明の神事。五月 惣祈念。六月 夏越行事。同十五日



末社祭。七月盂拂行事。臨時祈雨行事。十五日稻虫拂行事。

○廿七日御射山祭前夜燈籠籠掃。八月相撲神夏。十五日祇園祭。二百十日

風神祭。九月九日行夏。廿八日新嘗會。十一月相嘗行事。臨時冬至

祭。十二月節令年中行事清大後。同晦日疫神祭。

祭禮四月中申の日なり初の申日大口明乃神夏として早朝倉科山の

三の瀧の清水と汲湯せ水玉れ神前へ供へ水神川神五穀の神と祀り

屋代堰組合て十八ヶ村用水の大口千隈川へ小幣一本又穀水共一時小

流き任先規領主より神供料は供薪は傍物忌行は棚本亦下右

へ屋代と雨宮と兩社取納廿五俵之但十俵八屋代神主 十六俵雨宮神主。極月由門去位連傍物

供薪等吉例の通並下い。備四月系礼舊日造甘酒餅を供神前二餅の形一は餅

形。神鏡磨式。三滝水と梅水ゆく磨役人長一人助三人淨衣ゆく磨末丸。神輿

申此日申の上刻御動座于時往古へ領主進神前神主神酒を初め飲之

指を神主納む是一の式なり。今ハ一ッ物とて領主れ形ゆて済む

○雨乃宮山王より法途の行列美麗を盡し來る於是當社神輿供奉

れ行列を構へ法先道として神供神酒等雨の文へ送る次は梯次に

四神の矛まうり次矛以續く一ッ物とて諸侯の形の警固騎馬武者弓矢炮

槍長刀神主れ駕輿丁白張布衣素襖掌下先手後手練物行列供

奉れ者都く三百余人古例の定敷無相違次矛と守り雨の宮へ神幸以

時雨宮山王れ神輿も華表前に居る其前を通る唐崎郡神旅暫

は棚居る雨宮神主奉幣祝詞神輿還沛の時雨宮の行列供奉始乃あ

神輿通行道矢代東裏往還の側に小道一筋あり古道と唱ふ往古

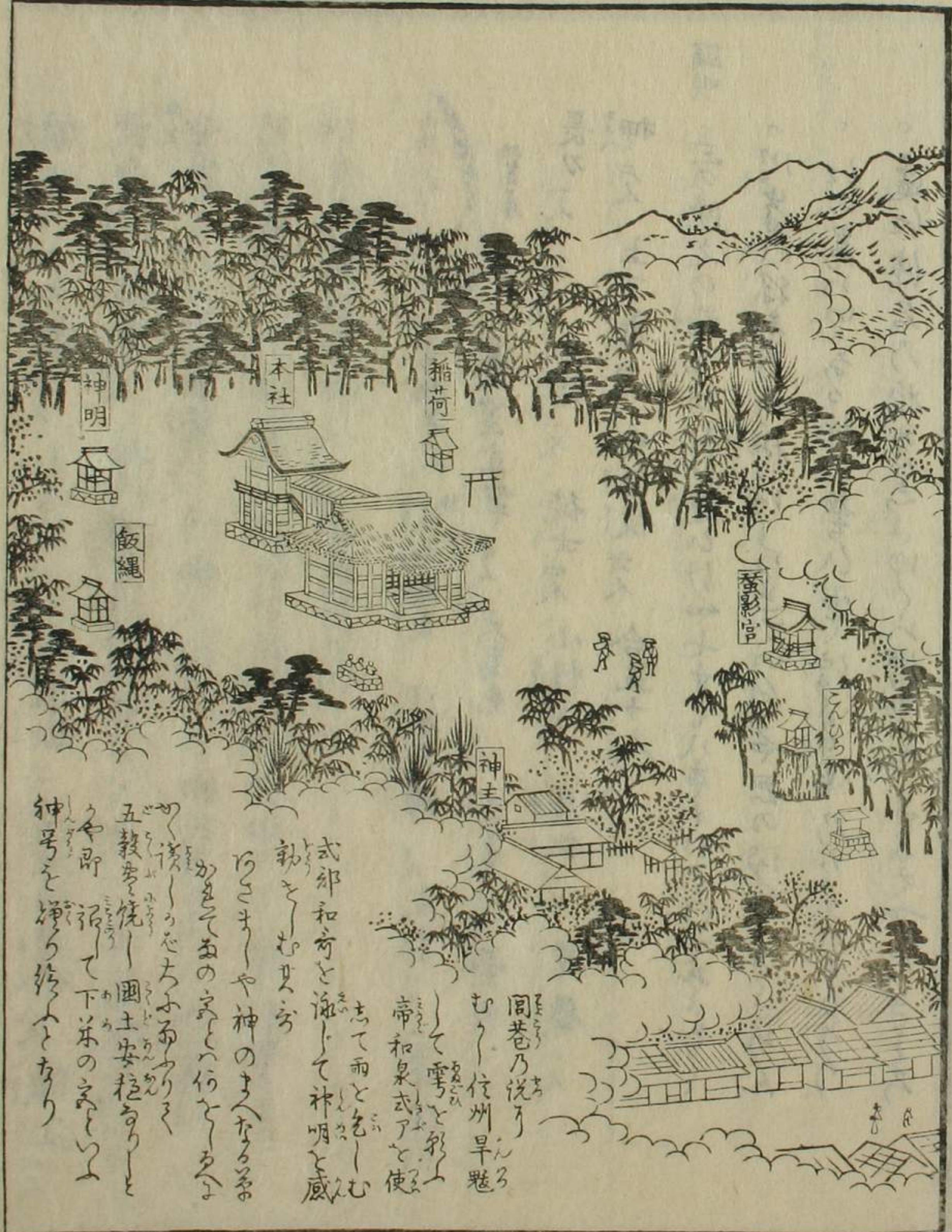
任國の領主埴科大外從五位下金刺舎人負長城内へ神輿法途の麓

大領の門前へ直に通約の道筋故古例の通り神幸なり

○同日雨の宮山王祭人數 鉾物 二人 行夏 六人 社宮司 六人 右大臣 六人

左大臣 六人 兒躰 七人 御鋏 二人

右 上 宝珠獅子 六人 陽獅子 六人 左 上 陽獅子 六人 右 上 陽獅子 六人 左 上 陽獅子 六人



同巻乃説了
 むく 住州早魁
 帝和泉式アと使
 式和帝と海して神明と感
 初とむ其方
 りこまや神のよなるる
 かきそぬのさくへ何とあふ
 切後しうをたふありそ
 五教を統一國土安粒ありと
 今即 詔して下平のさくし
 神号を輝らけりなり



雨の宮村
 山王宮
 唐崎明神
 左の河

唐崎明神
 春江補畫

大嬢 大伴家持一隔山重成物乎月夜好見云是山城相樂郡その哥なり

夫本

蝶の羽乃うさね衣れむく山暮茶漬き風のつらうね 家隆

同

ゆる郷々をくもりけ一きこゆる我ういそりて 吾 山暮

名考

花かゆ名のこりひく山八言のさる歌のしらき 中務

同

むれきの衣久うれ一きこねあし雲暮かこふられと 山暮

○鼻取地藏一重山の頂に鼻取地藏といふ由縁と尋ふ縁起を足さ侍ら

昔この千町が澳矢代あきやしろの村小食こくの妻婦あり男おとこは芸耕業うゑのわざとよむは妻の麻績系あまのつぎ縁ゆかりと世後よのあとのもる其暇ひまは近きき地蔵井ぢざうゐ小朔夕こさくゆふあり侍養やしやうさう右みぎといふ忠ちゆうたり男おとこ成年せうねん春はるさるはより例たとへありはかや中なかつ打ちぬ弁花べんか植根うゑねと咲さ乳ちちと子規こき鼻同はなどうの農のうれねを告つるはををり開ひらけりけりけ地蔵ぢざうと地蔵井ぢざうゐに説とくはあそと皆みな人ひとも田いう急いそ目めあそ仕し舞まつとて収こむるはうらうら田いの小こ草くさねと成なり月つき植うゑべき共とも是こゝに侍しやうす日ひと修しゆねする甲斐かひあはば夫おとこの病やまひを一日いちにちもたや平へい念ねんたそ

あめ終はつりも夜よ令しやう後ごもくろ昔むかし田いと植うゑ後ご一ひとまばい上の幸さいわいなりん女むすめの色いろ馬うまは鼻はなえんたにあはまの真まこと取とりて形かたちの如ごとく搔かきりて植うゑぬべし嗚な呼よま浮うき山やまの神かみも仏ぶつもなれりうと歌うた居ゐるが何なにもとも形かたちく小僧こそう一人ひとり来きり女むすめにむむく古歌ふるうたを吟うたむ此こゝ里さとにゆひさる人の方かたれやらむゆらうまてに早はや苗なへとぬい女むすめ是こゝを問とて扱あらうまきお小僧こそうう邪よこしまも此こゝ奇きに延の喜よろこれ帝みかどときとえさそ終はつつ醍醐たいご天皇てんわうの御み製しやうせやよく因よ縁ゆかりにお小僧こそうよゆひさる人と有ありねどかりりおねべきまいるやみゆらね人ひと信しんよおを僕かみねし馬うまの鼻はな取とり人ひととあはば女むすめたれども鼻はなえんして植うゑなんものをとりへ小僧こそうはういさむ勢いきほも人ひと我われ等ら馬うまの鼻はなえんくあはせんとて馬うま牽ひき出でりて歌うた手て滋しをれくに農具のうぐえあはせり誘いひゆる女むすめを嬉うれしく何なにかぬくそは田い面めんおねり立たち小僧こそうに馬うまは鼻はなえんくせ甲斐かひなくしと鼻はなえんして形かたちれむくは田いをりまき小僧こそうと草くさ卧ふさる気け色いろもたぐ様よう様ようよく面白おもしろき舞まつて月つき夜よより東あづまや冷ひやく終はつ夜よ八はち代だい



遊遊
三丈婦の
橋
田植

春江補畫



地藏不さつ
僧と化して
馬の鼻を
取とす一団

四八
五十

長者乃田植りくちやと田唄を謡ひ植ふきり女限りぬくよらこ
お小僧よつゝの行方なきに馳走なかり福とみ日と十日も苗立て
麦飯まき先系くせん必をかき終るく同ゆき小僧をよらまひ
くら鮮るる氣色やく戸垣は海に体ひぬ女の妻の飯持乃汁を
取あつて先あり一研を見よ小僧形一門あく味どもく誤く
せは驚てらうたあうと尋求むもゆ方知くを詮方ぬく我
家ふより小僧の行来も預んと地藏尊へ奉り伺へぬきや法手
足た下り法教まで泥ふまるとく馬け鼻取一竹を縄付これ
俵側小まきありきる叔ら常く修行なり奉る地藏井のぬを蒙
りけるみやとそよとそ有難さ細りん言葉もなうりきりてまより
程なく夫の病も愈くま輝りるも耕作ゆゆりしや秋風
稲葉に音信く実ふ一粒萬倍乃壽を唱へ次第に富貴乃身と
成り子孫繁昌して八代長者と味さる此因とて今に鼻取地

藏と称しきり埴科郡矢代邑山崎山地藏院大福寺持也

○屋代安藝守義綱城趾一重山ふあり村上家分地屋代二郎宗盛乃
末葉なり此子孫今三千石ゆく街旗本にあり

○菽蔴村 立場あり真田織の帯打紐等と名物とけ奇麗なる土産
なり又家毎に遠目鏡ありて千隈川を隔く姥捨山を眺望す

○下戸倉八丁程お對して巷と方々立場之有明山の麓ゆく姥捨山の西に
見ゆる上戸倉荊谷原右ふてて笄の渡場あり又横吹といふ村上家乃
古城山の腰中て岩石屏風を立たる如くなるに右と千隈川の急流渦巻
て眩暈をたれをうりま冠着山西小相對をたせ沢雨の向碑あり

横吹や駒をい形ゆく雲りし

或曰けり芭蕉前うり代

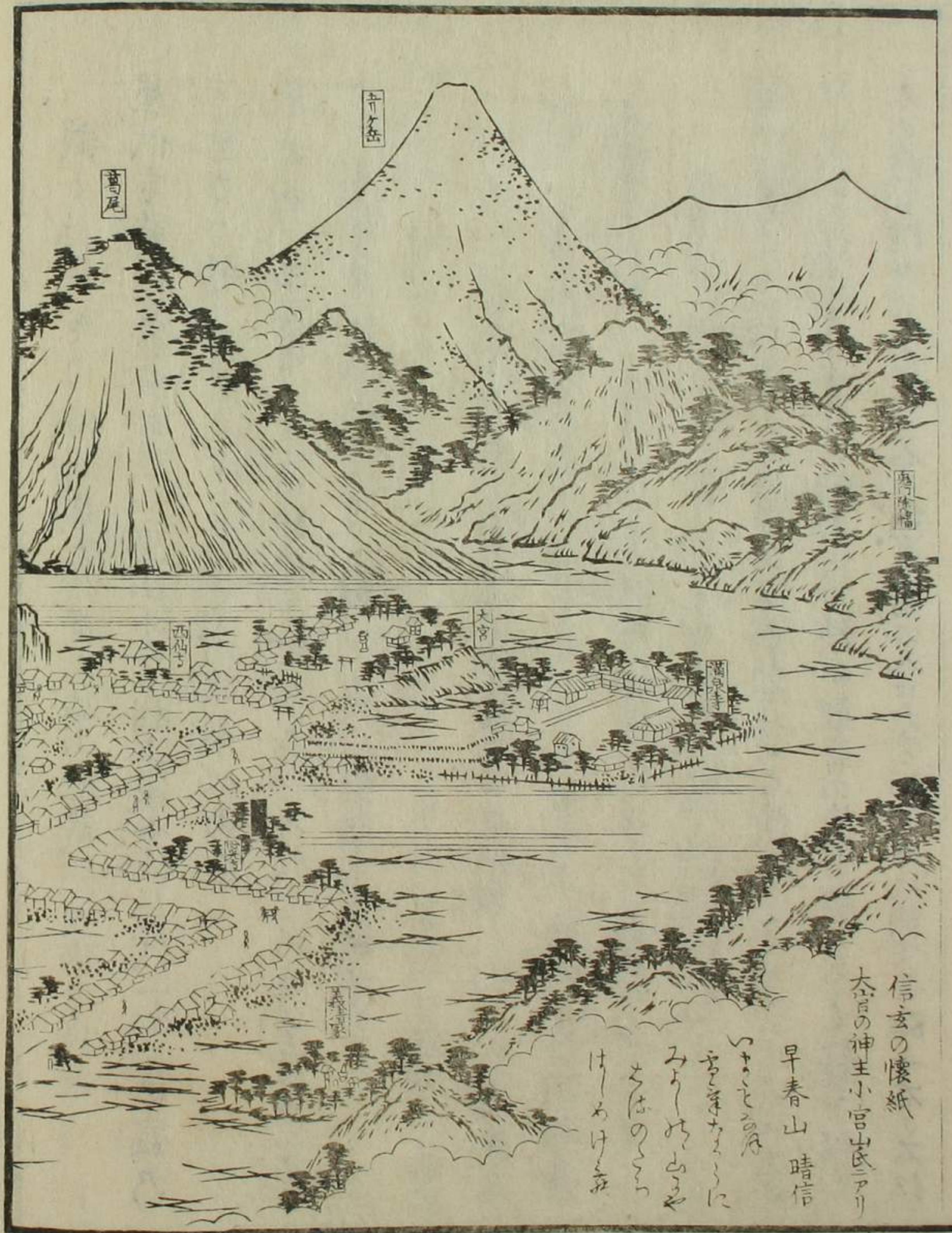
か賀彦の庵中みりや

横吹坂を下ふたの谷に地藏井れ丈又斗なる石像有まはりしとゆその
故らむじ徑式尺す斗の鍋蓋の鏡小観音の像を鑄るく鎖を以て
本の枝よはりてありけ今に坂本宿の入口なる西仙寺に納て其跡小右の石仏

坂木宿
 横吹
 坂木神社
 満泉寺
 心光寺
 西仙寺
 葛尾古城山
 五里ヶ岳
 焼飯山
 千曲川
 中崙
 村上義清塚



春江補畫



信玄の懐紙
 太官の神主小宮山氏アリ
 早春山 晴信
 春の山に
 春の山に
 春の山に
 春の山に
 春の山に

四ノ五十二

を建くはりし佛といひ傳ふとて往古の仕立場なりとぞ

坂木科

上田三里八町榭坂城とも書け九丁程相對して巷を方々むりい嵩
尾の城下なりしとぞ坂木のついで南条中条北条とふる南条は今嵐省
とつし中条も今中条村なり北条も即坂木宿なり

坂城神社 葛尾古城山の麓に村上在城の以城内なりしといふ

祭神大己貴命 事代主命又健南方命と合祀す社傳不詳といふも
人皇十二代景行天皇に清宇勸請とて傳ふ郷東の野に飯炊平といふ所
日本武尊當国通行し給ふ耐言備武彦此所より飯炊の事と計ふといふ
傳ふ其まに清射山明神とて祠あり尚社の附屬といふ神領も村上家の
頃三百貫又其耐神主小宮山和泉守兼武乃社職といふ其後甲州領とぬ
永祿十一年に武田家より七畝文の地と賜ふ村上家此朱印抽の寫

はら

尚城に徳守大夫清神領不百計指書文に小日記あり

之平お自今已存断て有お遠く早免祭礼本不て
鳥標に代々 於此志也 仍中件

天文元年 辰年

二月 村上朱印

坂木大文神社

小宮山和泉守

尚社に神之職なるあり侍従に方 上意の礼と上意の
勿論に又於餘別一圓相奉るありありあり
上意の礼と上意の 社領三百貫

天文七年

二月

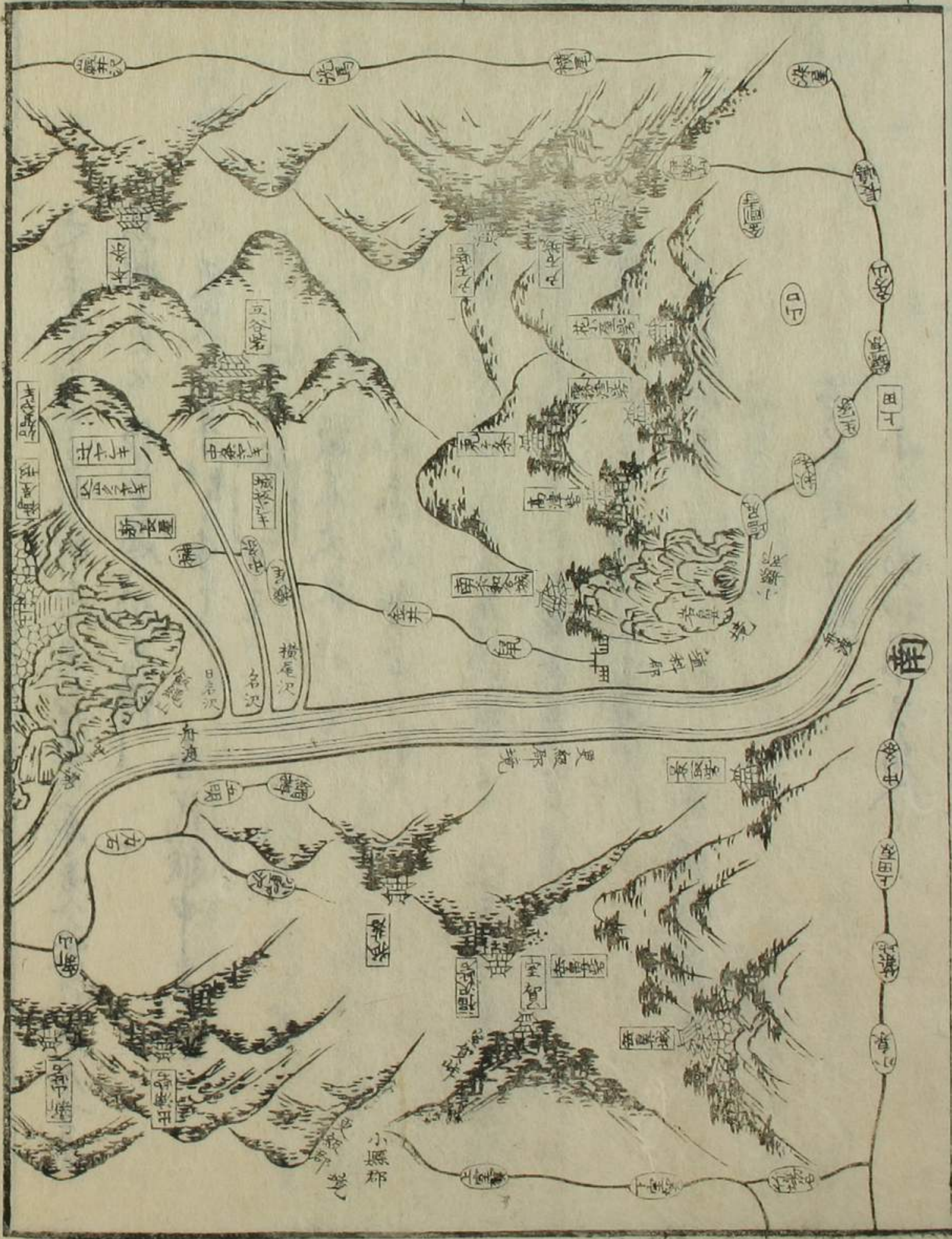
尚社に神之職

小宮山和泉守

出浦下野

年

村上家
本城
附城
諸砦
けん坂本の
竹鼻氏小
不以後より
諸砦へ
出之



春江補畫

武田家
朱印写

九段 定

坂本大工市社領之事以先代市判累年以來ありて所存本
山内所領之事ありて早荒祭礼亦所存有急務に被
作出者也何由也

天正七年十一月十七日

佐別坂本

大工市社領之事

乃於大工市
申す

坂本大工市社領之事以先代市判累年以來ありて所存本
山内所領之事ありて早荒祭礼亦所存有急務に被
作出者也何由也

天正九年十一月

九段

乃於大工市

坂本大工市社領之事以先代市判累年以來ありて所存本
山内所領之事ありて早荒祭礼亦所存有急務に被
作出者也何由也

乃於大工市

右村上武田の證文四通共焼失して記録にのこ残たりとぞ

柞神の城は埴科郡北条安形庄葛尾直高柞より十餘丁繩張天元二祀
年普請始り山城四百六十丁攝當時一方は要害川中嶋表は追分口矢代小攝へ
東方五里ヶ無西表は福井大寺に南當手は方は千隈川と受横吹の方は出品
石峯立屏風の如く菴温松柏茂たり小縣郡境岩鼻小攝 此所會地の
岡の跡あり 柞屋
形浦方北条旧名小屋南方日名沢川京東方穀垣攝西の方堀攝並本は成亥
の方に柞神社立るは屋形南を諸士屋敷は倉田厩は長屋山山の藤原唐
穿明神の社南日名北日名緒士家中屋敷遠堀登城口鎌倉山王宮町
家市場と建連わたり正曆四年癸巳迄十五ヶ年の間小攝城被焼たると
是と軍卒者流城取乃傳りて繁榮の地とせたり

○村上山満泉寺

曹洞宗上州長樂寺に属し
岡山長樂寺二代勅特賜見尊禪寺

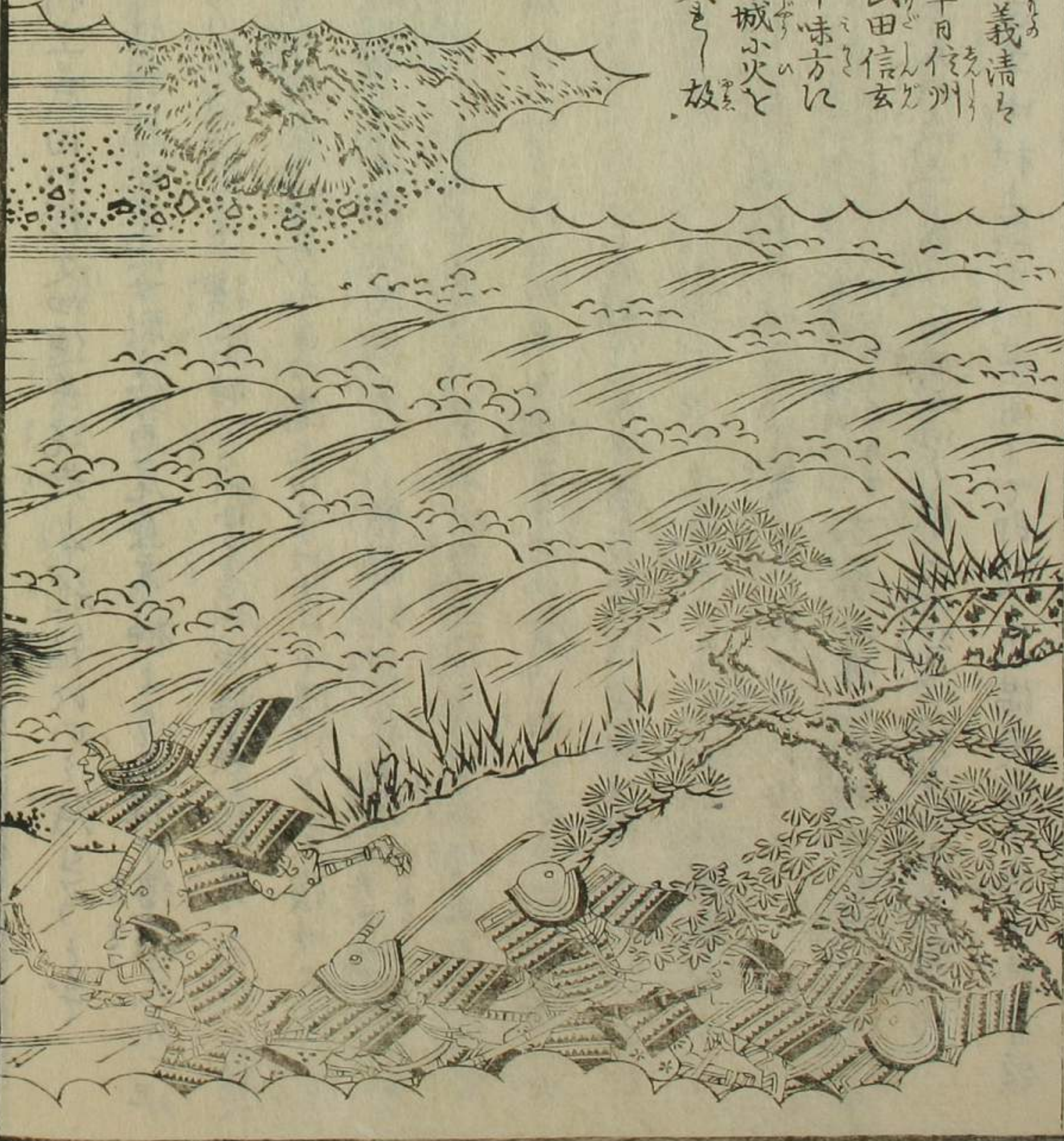
本尊石佛の釈迦如来内仏弘法

作の辨才天内丈五寸獲一の灰を以て彫之は背に弘法の法判有

當寺は永正年中村上顯国同基めりて即村上山満泉寺と唱ふ為寺領



正四位左少将源義清
 天文十六年八月十日信州
 上田原に於て武田信玄
 と合戦の時敗軍未方に
 及忠の者も本城小火と
 うけ敵勢と引入りて故
 我場より直小
 水内郡芋川の
 城へ引えまかり
 越後は赤坂の
 赤坂城に越後は
 岩舟郡村上あり
 越後に五万石村
 数五十八ヶ村越後
 酒井彈正たり
 此時赤坂修理亮
 一人供奉あり



近郷中の条下村小於て八十英文寄附武田領と成て廿六貫文小成り其後
寺領廢も又天正年中村上國清義清海津安堵れ廿五貫文寄附以下略之

○中門の額山の上 四辻大納言 ○本堂額満 大徳寺 泉 宙宝華

村上顯國の塚は所はと ○同義清塚街道田町左側小村上義清之墓 といふ抗建奥の林の内五輪塚あり

○同國清塚まに ○村上持城。戸石。葛尾。涼沢。觀音寺。桂山。天飾

○同附塚持高家胤。高梨摂津守政頼。井上左衛門尉政満。出浦對馬守

盛為。屋代安藝守義綱。室賀盛清入道一葉軒。清野道壽軒。須田

相摸守親頼 以上七家末孫の所旗本并小尾州家又上杉家真田家小

ふ在勤なり 右村上家の支々其所の者所持の抄あり 写して是と出し 差よ贅まらん

信府統記

埴科郡葛尾の城は在り村上義清と信濃源氏より更科水内高井佐久
俱に五郡餘を従へ領も出箇中れ大身なり其餘の郡も屬し一人を

も又五郡の中にも他家へ従ひける人もあり混ぜり其麾下に依 高梨井上隅田 和田布下

樂岩寺 浅野 岩野 高坂 西条 平賀 相木 芦田 瀬馬 寺尾 綿内 屋代 南宮 河田 大室 岩竹 小田切 余地 塩寺 笠原 平原 平尾 望月 下曾根 前山 内山 春日 山部

尾田井 塩川 安田 須田 栗田 早川 浅野

○中の条村十四五町民家相對して巻をたせり此節麦蒔田植の喫勇は

一く昇平の御代乃風俗甚耕時を遠くを民の産業のし開り

○鼠村 又鼠岳 五丁お對して巻をたれ此邊縁にきる巖石れ高山天よ峙ち

左に千曲川の急流矢れ如し即會地の関乃政なりといふ地名考ふ其終不詳

よりつり猶尋ねる會地早雄神社と稱する宮あり 按會地早雄神社 国史不又あらけ

閑院宮御祈願所とて其所少く一枚の摺物を得たりたし寫す

鼠大明神鎮座由来由會地の関乃記

水蘆荊をぬくの國に舍此乃雲とつる東に嶽くさる岩山篠舟西に

巻綿を巻る松樹茂りそそ高き若き出麓ろ子限の流を疎くし

漲りて小越に落入ぬと地科文級小縣の三郡鼎のおやく結びらふ

地りて吾妻より越後小通順路一筋に続きゆくさうりりふ

りららと逢ふ地なれば舍此の関とせりける往昔日本武尊



和名城山
 水晶山
 伊勢の神明
 芭蕉の翁乃
 白碑あり
 岩鼻の嶮路に
 岩鼻や
 やくふこ
 月の友
 せしり
 大七紙



埴科郡鼠宿
 鼠大明神
 耕雲寺
 岩鼻
 千曲川 半過山
 會地関の跡
 名寄
 志るれらや
 かあゆんら
 けりたのん
 けりたのん
 ああち乃雲い
 きひーな
 知家

東夷征討の折々此地より行暮る多し大伴の健日連公に
命じて本のもや柙根と刈たらしむ假小宮造りし
やう終ふおち月らりりり東に嶮くた巖石覆ひて
ほを移せにんとの清河わき又清自ら清幣と立
て大己貴命を勧請し嵐大明神と崇め祀り終ふ是小依て
嵐さく物をそこの災を鎮めそがう人に蚕糧を守り給ふ
中畧の物に此會地ふ出泥し給ふにより出速男神といやな
熊野拾泥に此會地ふ出泥し給ふにより出速男神といやな
ふ故に會地早雄神社と稱し四座に神同殿小座に此會地の
関いぬゆりしる名ふかるよ一諸抄抄ふ明らふかまどつらの代より
閑に成りしとあむ四方にけい名布を知りしと持ふよ寛永
三年丙寅後のきさら或社司源義利誌

文化二乙丑年再板

會地の宮神主 源義國

○會地八景

山岩真の葛紅葉

會地強

嵐の宮郭公

具足岩雪吹

和合楳月

山寺時雨

鞆掛石陽炎

千曲川花の浪

社内より兼れ歌と石に彫て建

天平勝宝七歳二月十六日

知波夜布留賀美乃美佐賀尔怒佐麻都里伊波負伊能知波

意毛知我多米

主帳埴科神人 部子忍男

○竜田山耕雲寺

曹洞派上田属 伊勢山陽養寺

嵐宿の山上に有る信玄自筆の書と納む

國之中郭有僧呼曰乾巨有庵題無名兵於于人需予扁是云

耕雲證其上旨曰

一重白矣一重紅鋤破招提西又東
別有閑田佳景在或時種月或時風

維時天文廿二年三月十七日

大膳大夫兼信濃守

源暗信花押

耕雲寺

定

卧竜 朱印

一向後祠堂涉利倍徳改く事

一 山前新造まゝに古家三万口次くは菅信俊の事

右二ヶ条目今以後被成也殺免に被 任出る也の事

天正八子辰辰
ウチ十九日
安部かかち
なまこ

料云云

○岩鼻 和合の塚山麓みく鳥さうとて翔まぐは嶮岨なり年々虧墮
きる大岩若むして十間十五間位或は二万三万程の岩幾許とらふ敷志
き落重り又山をたせり其際と傳ひく下塩尻上塩尻秋和等乃
村ををるく上田の城下に至る塚下れ入口新町より大へ入る千曲川橋を
渉る中の奈加畠小島干梅舞田八木沢の五ヶ村と越て別所村の七久
里温泉男神岳女神岳三樂四院等とも見らる

善光寺道名所圖會卷之四終

